矢崎遺跡

（やさきいせき）

2009年3月

長野県飯田市教育委員会

矢　崎　遺　跡

2009年3月

長野県飯田市教育委員会

SK19

SK22

SK20

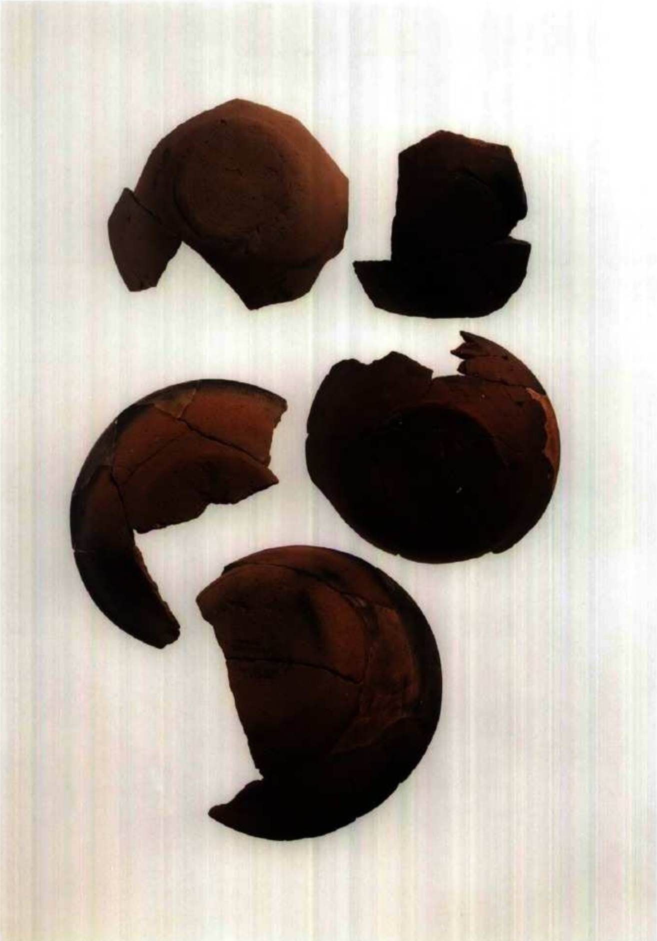
巻頭図版２

SB27

SB28

SB28

SB28



SB29

序

飯田市は、豊かな自然に恵まれ、長い歴史と伝統文化をもつまちとして知られています。

埋蔵文化財の発掘調査による新たな発見によって、当地方の古代史はしだいに明らかになっていきます。これまでわかってきた古代人の足跡を追ってみると、古代人の生活域と現代人の生活域の多くが重なっており、人間の営みの継続性を知るとともに、こうしたなかで埋蔵文化財を残すということの難しさを強く感じます。

今回発掘調査を実施した矢崎遺跡は、詳細分布調査などにより以前から多くの土器が表採される遺跡の一つとして知られていました。今回の発掘調査により、縄文時代から平安時代に至る人間の生活痕跡が確認され、遺跡の性格がより明らかとなる貴重な成果を得ることができました。

飯田市は、「第５次基本構想・基本計画」の中での政策として、「地域の自然・歴史・文化を活かし続けるまちづくり」を挙げています。失われる埋蔵文化財を記録保存という形で残すことは次善の策ではありますが、こうした記録が地域の資源として、有効に活用されることを願うばかりです。

最後になりましたが、発掘調査に際し、多大なるご理解とご協力をいただいた地域住民の皆様、そして長期にわたり発掘・整理作業に従事していただいた皆様に、多大なる謝意を申し上げる次第であります。

平成21年３月

飯田市教育委員会
教育長　伊　澤　宏　爾

例　言

1．本報告書は市道改良工事に先立ち実施された飯田市上郷別府所在の埋蔵文化財包蔵地　矢崎遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．発掘調査は飯田市建設部土木課からの委託を受けて、飯田市教育委員会が実施した。

3．調査は、平成19年度に発掘調査を実施し、平成20年度に整理作業及び報告書の刊行を行った。

4．調査実施にあたり、調査グリット規定は飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づくものであり、基準点測量は有限会社Ｍ２クリエーションに委託した。矢崎遺跡における発掘調査位置は国土基本図の区画ＬC85―02に位置する。なお、座標は世界測地系による。

5．矢崎遺跡の発掘調査及び整理作業には略号ＹＺＫ737－１を用いた。また、遺構には略号として、竪穴住居址―ＳＢ、土坑―ＳＫ、溝址―ＳＤ、方形周溝墓―ＳＭを用いた。

6．本書の記載は遺構ごとに本文・遺構図・遺物図を掲載し、巻末に写真図版を掲載した。

7．土層観察については、小山正忠・竹原秀夫　1996　『新版標準土色帖』による。

8．実測図において、遺構図中のスクリーントーンの凡例は以下のとおりである。

　—貼床、　—炭化物、∴∴—焼土、　—骨

　また、遺構図中の数字は床面からの深さを示す。

9．遺構写真は発掘調査担当者が撮影し、遺物写真は西大寺フォト　杉本和樹氏に委託した。

10. 本書の執筆・編集は澁谷恵美子が行い、山下誠一が総括した。

11. 本書に関する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館で保管している。

12. 本書作成にあたっては長野県立歴史館　原明芳氏にご教示いただいた。

目　　次

本文目次

巻頭図版
序
例　言
目　次
第Ⅰ章　経　過 …… 1
　第1節　調査の経過 …… 1
　第2節　調査組織 …… 1
第Ⅱ章　遺跡の環境 …… 3
　第1節　自然環境 …… 3
　第2節　歴史環境 …… 4
第Ⅲ章　調査結果 …… 7
　第1節　遺跡の概要と基本層序 …… 7
　第2節　遺構と遺物 …… 13
　　1. 竪穴住居址（ＳＢ） …… 13
　　　（1）縄文時代
　　　（2）弥生時代
　　　（3）古墳時代
　　　（4）平安時代
　　2. 土坑（ＳＫ） …… 29
　　3. 溝址（ＳＤ） …… 37
　　4. 方形周溝墓（ＳＭ） …… 41
　　5. その他の遺構・遺物 …… 42
第Ⅳ章　まとめ …… 50
　　1. 縄文時代前期後半 …… 50
　　2. 弥生時代後期後半 …… 53
　　3. 古墳時代中期後半～後期前半 …… 54
　　4. 平安時代前期 …… 55
　　5. 遺構外出土遺物 …… 56
報告書抄録

図版目次

第1図　調査遺跡位置図 …… 2
第2図　調査位置及び周辺遺跡位置図 …… 5
第3図　基準メッシュ調査位置図 …… 6
第4図　基本層序 …… 8
第5図　調査区及びグリット図 …… 9
第6図　Ⅰ・Ⅳ区全体図 …… 10
第7図　Ⅱ・Ⅲ区全体図 …… 11
第8図　Ⅵ区全体図 …… 12
第9図　ＳＢ18・ＳＢ19炉址・ＳＢ21 …… 14
第10図　ＳＢ20・ＳＢ22 …… 16
第11図　ＳＢ23 …… 17
第12図　ＳＢ25 …… 18
第13図　ＳＢ26 …… 20
第14図　ＳＢ26遺物出土状況 …… 21
第15図　ＳＢ27 …… 22
第16図　ＳＢ27遺物出土状況 …… 23
第17図　ＳＢ31 …… 24
第18図　ＳＢ24・ＳＢ28 …… 26
第19図　ＳＢ29・ＳＢ30カマド …… 28
第20図　ＳＫ10～15・ＳＫ17 …… 30
第21図　ＳＫ16・ＳＫ18～22 …… 32
第22図　ＳＫ23～27 …… 34
第23図　ＳＫ28～35 …… 36
第24図　ＳＫ36 …… 37
第25図　ＳＤ01～05 …… 39
第26図　ＳＤ06・07 …… 40
第27図　ＳＭ01 …… 41
第28図　Ⅰ区周辺ピット図 …… 43
第29図　Ⅱ区周辺ピット図 …… 44
第30図　Ⅲ区周辺ピット図 …… 45
第31図　Ⅳ区周辺ピット図 …… 46
第32図　Ⅵ区周辺ピット図（1） …… 47
第33図　Ⅵ区周辺ピット図（2） …… 48
第34図　Ⅵ区周辺ピット図（3） …… 49
第35図　時代別遺構分布図（1） …… 51
第36図　時代別遺構分布図（2） …… 52

第37図　ＳＢ18・ＳＢ19・ＳＢ20・ＳＢ22
出土遺物 …… 59
第38図　ＳＢ25・ＳＢ26出土遺物 …… 60
第39図　ＳＢ27・ＳＢ31出土遺物 …… 61
第40図　ＳＢ24・ＳＢ28出土遺物 …… 62
第41図　ＳＢ29・ＳＢ30出土遺物 …… 63
第42図　墨書土器（ＳＢ27・ＳＢ28・ＳＢ29）
…… 64
第43図　ＳＫ10・ＳＫ19・ＳＫ20・ＳＫ22・
ＳＫ27・ＳＫ29出土遺物 …… 65
第44図　ＳＫ13・ＳＫ18・ＳＫ23・ＳＫ28・
ＳＫ31・ＳＫ36・ＳＤ01・ＳＤ02・
ＳＤ03・ＳＤ07出土遺物 …… 66
第45図　ＳＭ01出土遺物 …… 67
第46図　遺構外出土遺物 …… 68
第47図　ＳＢ22・ＳＢ24・ＳＢ26・ＳＢ27・
ＳＫ10・ＳＫ11・ＳＫ12・ＳＫ29・
ＳＤ02・ＳＤ03・ＳＤ04・ＳＭ01
出土石器 …… 69
第48図　遺構外出土石器 …… 70
第49図　遺構外出土土製品・玉類 …… 71

写真図版目次

巻頭図版１　ＳＫ19・ＳＫ20・ＳＫ22出土遺物
巻頭図版２　ＳＢ27・ＳＢ28出土遺物
巻頭図版３　ＳＢ29出土遺物
図版１　Ｉ区全景・Ⅱ区全景 …… 75
図版２　Ⅲ区全景・Ⅳ区全景 …… 76
図版３　Ⅵ区全景 …… 77
図版４　ＳＢ18・ＳＢ19炉址・ＳＢ21 …… 78
図版５　ＳＢ20・同炉址・炉址断面 …… 79
図版６　ＳＢ22・同炉址・炉址断面・ＳＫ12　80
図版７　ＳＢ20・ＳＢ22・ＳＢ25・ＳＢ26　81
図版８　ＳＢ25・同カマド …… 82
図版９　ＳＢ26・同東カマド・西カマド・西カマド煙道・Ｐ５ …… 83
図版10　ＳＢ27・同炉址１・入口施設 …… 84
図版11　ＳＢ31カマド・カマド断面 …… 85
図版12　ＳＢ24・同断面・ＳＫ36 …… 86
図版13　Ⅲ区全景 …… 87
図版14　ＳＢ28・同断面 …… 88
図版15　ＳＢ29・同カマド・カマド掘り方　89
図版16　ＳＢ30カマド・カマド断面 …… 90
図版17　ＳＫ10〜12・17・19 …… 91
図版18　ＳＫ13〜15・18 …… 92
図版19　ＳＫ16・同断面 …… 93
図版20　ＳＫ22・同遺物出土状況 …… 94
図版21　ＳＫ20・21・23・24 …… 95
図版22　ＳＫ26・同焼土・炭・掘り方 …… 96
図版23　ＳＫ25・24・27・28 …… 97
図版24　ＳＫ29〜34 …… 98
図版25　ＳＫ36・同断面・上部・下部 …… 99
図版26　ＳＤ01〜04・ＳＭ01 …… 100
図版27　ＳＤ05・同断面・ＳＤ07 …… 101
図版28　ＳＤ06 …… 102
図版29　ＳＭ01・同土器棺・遺物出土状況　103
図版30　重機作業風景・測量作業風景・発掘調査風景 …… 104
図版31　ＳＢ18・ＳＢ19・ＳＢ22出土遺物　105
図版32　ＳＢ25・ＳＢ26・ＳＢ27・ＳＢ31出土遺物
…… 106
図版33　ＳＢ26出土遺物 …… 107
図版34　ＳＢ28出土遺物 …… 108
図版35　ＳＢ29出土遺物 …… 109
図版36　ＳＢ24・ＳＢ30出土遺物 …… 110
図版37　ＳＫ19・ＳＫ20・ＳＫ22出土遺物　111
図版38　ＳＫ10〜12・ＳＫ29・ＳＤ01〜03出土遺物
…… 112
図版39　ＳＭ01出土遺物 …… 113
図版40　遺構外出土土器 …… 114
図版41　遺構外出土土器 …… 115
図版42　遺構外出土土器 …… 116
図版43　遺構外出土遺物土製品・臼玉・土錘　117

第I章　経　過

第1節　調査の経過

平成19年1月26日付、飯田市大久保町2534番地　飯田市長　牧野光朗（飯田市建設部土木課）より、飯田市上郷別府737番地1他における「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知」が提出された。工事は市道改良工事を実施するものである。

工事計画地は埋蔵文化財包蔵地　矢崎遺跡にあたる。同遺跡は、昭和60・62年度に発掘調査を実施しており、縄文時代前期の集落址や奈良・平安時代の集落・工房址が確認されているほか、縄文時代晩期の遺物の出土でも知られている。

前述のような状況から、工事実施前に試掘調査を実施し地下の状況を確認した上で、再度協議を行うものとした。平成19年7月17日に試掘調査を実施したところ、縄文時代以降の竪穴住居址・土坑等を検出したことから、本発掘調査による記録保存を図ることとなった。

平成19年8月1日より現地における発掘調査を実施した。同月1日に重機による表土剥ぎを行い、2日に飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づく測量作業を委託実施し、作業員による遺構の掘り下げ作業を開始した。遺構の確認・掘り下げ・実測・写真撮影を順次行い、12月7日に現地での発掘作業をすべて終了した。引き続き、飯田市考古資料館において出土遺物や図面・写真類の整理を行った。

平成20年度は、同館において出土遺物の注記・接合復元・実測・写真撮影や遺構・遺物のトレース・版組等の各作業を行い、本報告書を刊行した。

第2節　調査組織

調査団

調査主体者	飯田市教育委員会　教育長　伊澤　宏爾
調査担当者	澁谷恵美子
調　査　員	山下誠一　下平博行　坂井勇雄　羽生俊郎
作　業　員	伊東裕子　金井照子　木下貞子　木下義男　小平まなみ　小島康夫　関島真由美 竹本常子　中田恵　仲村信　中村地香子　中平けい子　中山敏子　樋本宣子 福沢育子　松下省三　松本恭子　宮内真理子　森山律子　森藤美知子　吉川悦子

事務局

飯田市教育委員会

教育次長	関島隆夫
生涯学習・スポーツ課長	宇井延行
生涯学習・スポーツ課　文化財保護係長	山下誠一
生涯学習・スポーツ課　文化財保護係	宮澤貴子　澁谷恵美子　下平博行　坂井勇雄　羽生俊郎

第１図　調査遺跡位置図

第Ⅱ章　　遺跡の環境

第１節　自然環境（第１図）

飯田市は長野県の南部を並走する木曽山脈（中央アルプス）と、赤石山脈（南アルプス）の前山である伊那山脈に挟まれた伊那谷の南端、飯田盆地に位置する。また、平成17年10月１日に上村・南信濃村の２村との合併により、赤石山脈と伊那山脈に挟まれた遠山郷と呼ばれる地域も含んでいる。

伊那谷は南北に約100kmと長く、中央には天竜川が南流し、国内でも有数の段丘地形を形成している。北は諏訪地方・塩尻地方に、南は天竜川と秋葉街道伝いで遠州地方に、西は神坂峠や矢作川伝いに三河地方にそれぞれ通じており、飯田市は長野県の南の玄関口といえる場所にある。

伊那谷の基盤地質は領家帯に属す花崗岩・片麻岩である。一方伊那谷の東、伊那山脈と赤石山脈の間には中央構造線が走っており、三波帯・戸台構造帯・秩父帯・四万十帯が赤石山脈を構成している。この秩父帯・四万十帯から産する硬砂岩・緑色岩・チャート等の堆積岩は、三峰川・小渋川を伝って天竜川河床に分布し、旧石器時代以来、石器の材料として長く利用されている。

伊那谷の形成は、約250万年前に天竜川が流れ始めたことから始まる。伊那谷特有の段丘地形は赤石・木曽両山脈が隆起するに伴い、沖積地との間に形成された逆断層によるものである。この段丘は下伊那の地質図（1976）によると、高位面、高位段丘・古期扇状地、中位段丘・中期扇状地、低位段丘Ⅰ・新期扇状地、低位段丘Ⅱの５つに大きく編年されている。

気候からみると、飯田市の年間平均気温は12℃を超え、２月の平均気温は1.4℃、８月の平均気温は24.4℃と寒暖の差が激しく、内陸性の気候を示す。一方降水量からみれば年間約1600㎜、梅雨と台風シーズンにピークを迎え、冬には少なく太平洋岸式気候に属するといえる。

こうした地理的・気候的条件により、飯田下伊那地方には暖地性から亜高山性まで多種多様な動植物がみられる。植物の水平分布からみると暖地性と温帯性の接点にあたり、特に照葉樹林が存在することは県下の他地域と大きく異なっている。

矢崎遺跡が所在する上郷地区は飯田市街地の北側にあり、市全域からみると北寄りに位置している。また、東は天竜川を挟み下伊那郡喬木村に、南は野底川を挟み飯田市街地、飯田松川を挟み鼎・松尾地区に、北は土曽川を挟み座光寺地区にそれぞれ接している。天竜川は松尾地区までは広大な氾濫原を形成しており、矢崎遺跡はこの氾濫原に面した低位段丘上に位置している。地区の中央やや西寄りには、南北（松尾から川路へ）に走る断層により、比高差約30～50ｍの段丘崖があり、これを境に俗に「上段（うわだん）」と「下段（しただん）」と呼ばれている。地区内は数面の段丘から構成される複雑な地形を呈するが、各段丘は土曽川・野底川・飯田松川といった天竜川の支流に開析され、より複雑な小地形を形成している。

矢崎遺跡は下段にあり、地区内としては南端に位置する。標高は410～420ｍ、調査地点での標高は411～413ｍになり、天竜川と飯田松川との合流点に近い低位段丘上に位置する。この段丘は、南側では飯田松川の氾濫原に面しており東西に長い舌状台地となっている。段丘直下は湿地帯となり、現在でも湧水が確認できる。

第2節　歴史環境（第2図）

飯田市内で確認される遺跡は旧石器時代初頭まで遡ることができるが、旧石器時代から縄文時代草創期にかけての遺跡数は少なく、様相は不明な点も多い。

縄文時代に入ると、河川に面した低位段丘上に草創期の遺物が散在し、その後、西側の山麓周辺に遺跡が集中するが、時期が下るとともに台地先端へと遺跡の分布が広がる。中期に入ると爆発的に集落が増加し、地区内のほぼ全域に遺跡が分布するようになるが、後期から晩期にかけては遺跡数が極端に減少し、河川に面した低位段丘上に遺跡が分布する特徴がある。

弥生時代には、矢崎遺跡から東海的な条痕文系土器が出土しており、稲作の萌芽期にも人々が居住していたことが推測されるが、弥生時代前期の遺跡数は少なく不明瞭な点が多い。稲作が定着したといわれる弥生時代中期に入ると遺跡数が増加し、下段の低湿地に面した位置に集落が営まれる。後期に入ると下段の集落は発展し、上段の高燥地にまで集落が広がるようになる。段丘崖下や扇端部付近で発達する湧水や、小河川を利用した水田耕作や台地上の稲作が生活基盤であったと推定される。集落と墓域との関係をみると、一定規模の集落には近接して方形周溝墓を主体とする墓域が形成される傾向にある。

古墳時代中期後半から後期にかけて、飯田市内には多数の古墳が築造される。市内の古墳の特徴として、馬具・馬の墓壙が多く出土していることがまず特筆される。こうした馬に関する遺構・遺物の豊富さから、牧を生産基盤とした集団の存在が推定されている。上郷地区においては煙滅したものも含めて35基が確認されており、多くは別府地籍の台地の端部から緩斜地に立地する。特に県史跡である飯沼天神塚（雲彩寺）古墳や溝口の塚古墳は伊那谷を代表する古墳であるが、これら古墳の分布は地区内の南側に偏している。こうした古墳築造に関わる集団は、天竜川に向かって延びる舌状台地上に集落を形成しているものとみられる。

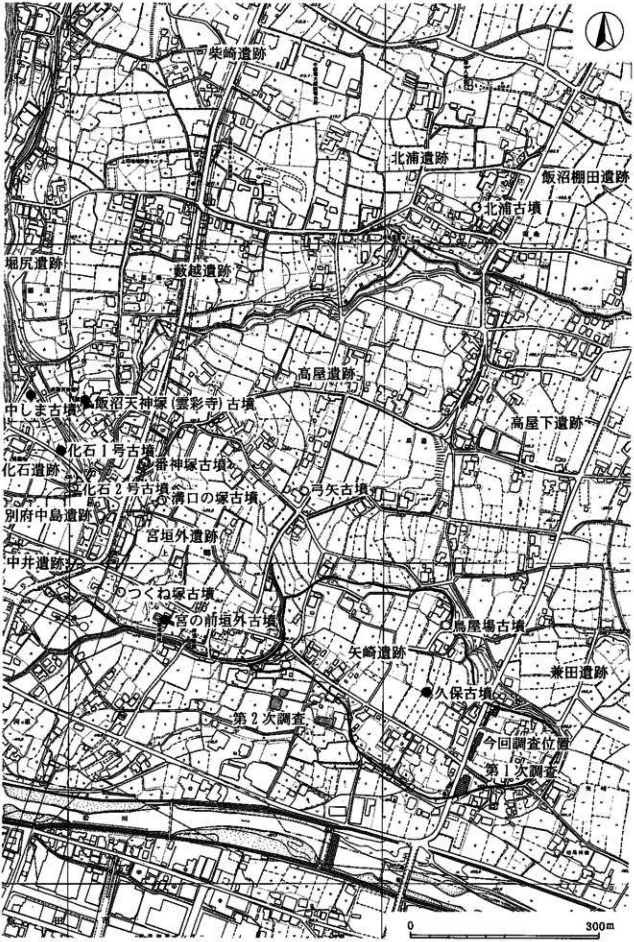
奈良時代になると北側に隣接する座光寺地区の恒川遺跡群では正倉域等が確認されており、古代伊那郡衙に比定されている。恒川遺跡群内でも当該期の集落は確認されているほか、上郷地区の堂垣外遺跡も郡衙と関連する集落の一つと位置付けられ、集落としては平安時代前半まで継続して営まれる。

上郷地区は、文献により古代には伊那郡麻績郷に含まれていたとみられ、中世には郡戸荘であった。郡戸荘は、平安時代末期には近衛家の所領であったが、中世前半期の様相は不明な点が多い。応仁（1467～1469）から文明（1469～1487）にかけては、知久氏と板西氏が交代で地頭となったが、文明10（1487）年以降は知久氏が地頭となっている。

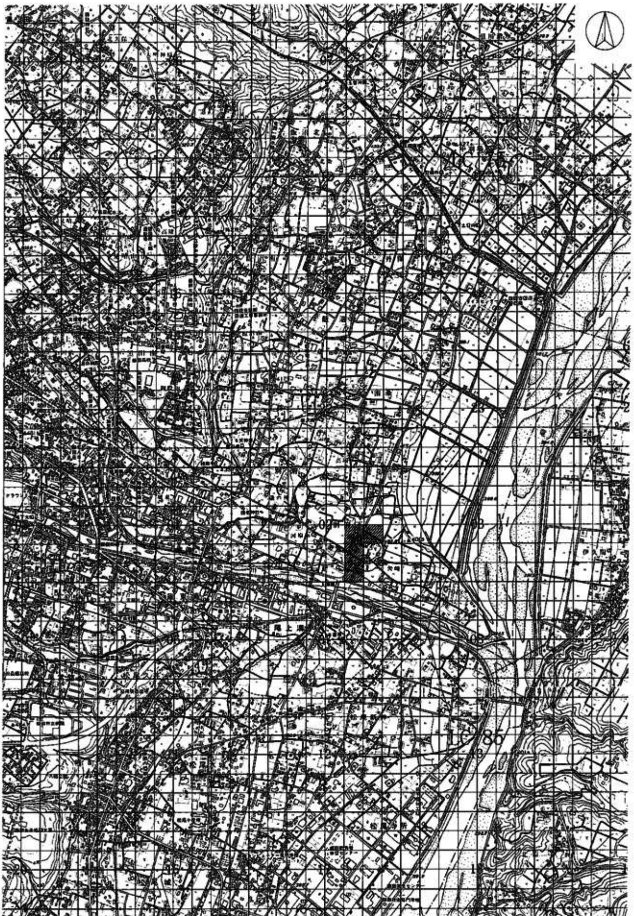
上郷地区の飯沼氏・黒田氏に関しては、応永7（1400）年の大塔の戦に参加した伊那衆、永享12（1440）年の結城合戦の結城陣番帳に両者の名前がみえるのみで、詳細は不明である。飯沼氏は現在の飯沼諏訪神社の地に、黒田氏は現在の原ノ城の地に居を構えたものと推察され、両氏は西面の板西氏と共に、北面の座光寺氏、天竜川対岸の知久氏と対峙したと思われる。こうした群雄割拠の戦国期であるが、武田氏の伊那谷侵攻とともに地方豪族の勢力は減退し、飯沼氏は滅亡したと言われている。

その後、織田・徳川・豊臣氏の統治を経て、上郷地区は近世において堀家が藩主を務める飯田藩の所領となった。この時代、飯田松川を境に以北の13カ村を上郷（かみごう）とし、以南の16カ村を下郷（しもごう）と呼び、それぞれ郷代官を置いて統治した。これが現在の上郷（かみさと）の呼称の始まりである。

明治22（1889）年に上郷村が誕生、昭和45（1970）年に上郷町となり、平成5年に飯田市と合併した。



第２図　調査位置及び周辺遺跡位置図



第３図　基準メッシュ調査位置図

第Ⅲ章　調査結果

第１節　遺跡の概要と基本層序

発掘調査は工程上分割して実施していることから、便宜上Ⅰ区からⅥ区に分かれている（第５図）。今回の調査で確認できた遺構は、竪穴住居址14軒（縄文時代３軒・弥生時代２軒・古墳時代５軒・平安時代４軒）、土坑26基、溝址７条、方形周溝墓１基である（第６～８図）。

基本層序は第４図（各層序の位置は第６～８図による）に遺構が確認された区のものを掲載した。

なお、各遺構の記述は同章第２節によるが、遺構が確認されなかった区は以下のとおりである。

Ⅰ区

今回の調査全体の基本となる基本層序を示す。位置としては段丘平坦部から崖際の縁辺部にあたる。縄文時代の竪穴住居址２軒、弥生時代の方形周溝墓１基、土坑１基、溝址４条を確認した。

Ⅱ区・Ⅲ区

Ⅱ区とⅢ区は調査区名が異なるが一続きである。基本層序はⅡ区では耕土（Ⅱ・Ⅲ層）の下に遺物包含層　（Ⅳ層）があり地山（Ⅵ′層）となる。Ⅲ区は造成土（Ⅰ層）—耕土（Ⅱ・Ⅲ層）があるが調査区全体で遺構が確認でき、遺構の多くは地山（Ⅵ′層）を掘り込んでいる。位置としては段丘平坦面にあたり、最も遺構分布が密な箇所である。Ⅱ区は縄文時代の竪穴住居址１軒、弥生時代の竪穴住居址２軒、古墳時代の竪穴住居址１軒、土坑３基を確認、Ⅲ区は古墳時代の竪穴住居址４軒、平安時代の竪穴住居址４軒、土坑10基、溝址２条を確認した。

Ⅳ区

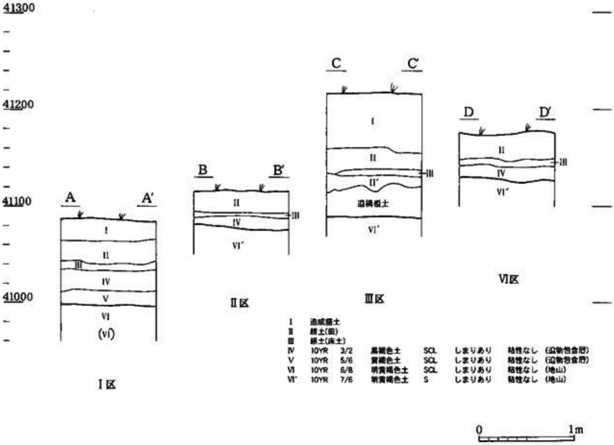
Ⅰ区の西側隣接地となる。段丘北側縁辺部にあたり、北側半分は本来段丘崖であるが、後世の盛土造成により拡張されている。また、遺構確認面となる地山まで後世の掘削が及んでいることから、Ⅰ区で検出された方形周溝墓（ＳＭ01）の延長部を含め、遺構を確認することはできず、時期・性格不明の小ピットがあるのみである。

Ⅴ区

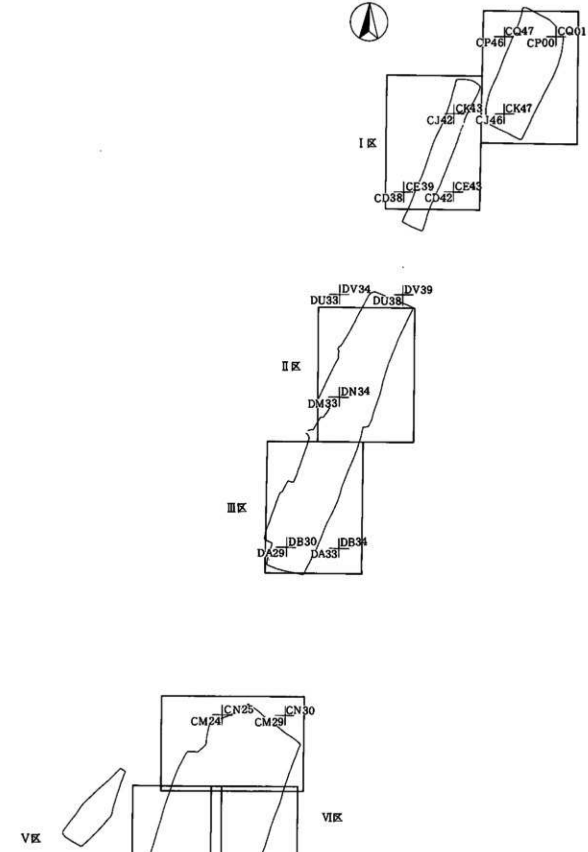
段丘南側縁辺部にあたる。調査区の南側は墓地となっている。耕土下が遺構確認面の地山となる。地山は黄橙色土の砂礫土で１ｍ以上の巨石を含む。遺構・遺物は確認されなかった。

Ⅵ区

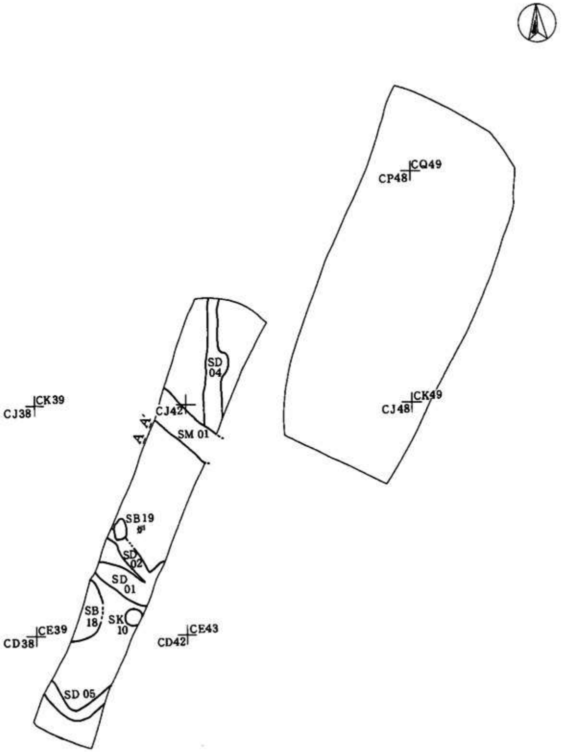
基本層序は耕土（Ⅱ・Ⅲ層）の下に遺物包含層　（Ⅳ層）があり地山（Ⅵ′層）となる。位置としては段丘南側縁辺部にあたる。耕土下の砂礫土が地山となる。土坑11基、溝址１条を確認した。柱穴とみられるピットを多数確認したが、掘立柱建物址となるものはなかった。全体として遺物の出土も極めて少なく、今回の調査で確認された各時期の集落はⅥ区には及んでいない可能性がある。


41300
41200
41100
41000
A A′
B B′
C C′
D D′
I
II
III
IV
V
VI
(VI)
II′
VI′
遺構覆土
I区
II区
III区
VI区
I 造成盛土
II 耕土(田)
III 耕土(床土)
IV 10YR 3/2 黒褐色土 SCL しまりあり 粘性なし (遺物包含層)
V 10YR 5/6 黄褐色土 SCL しまりあり 粘性なし (遺物包含層)
VI 10YR 6/8 明黄褐色土 SCL しまりあり 粘性なし (地山)
VI′ 10YR 7/6 明黄褐色土 S しまりあり 粘性なし (地山)
0 1m

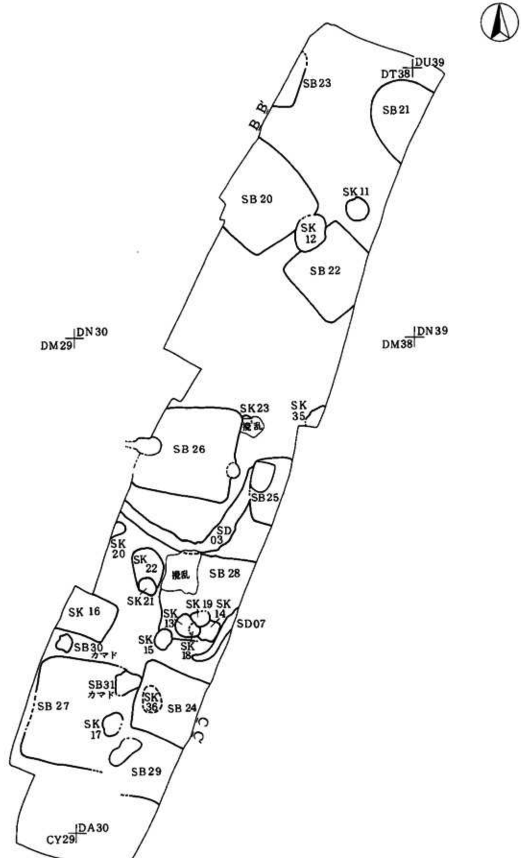
第4図　基本層序



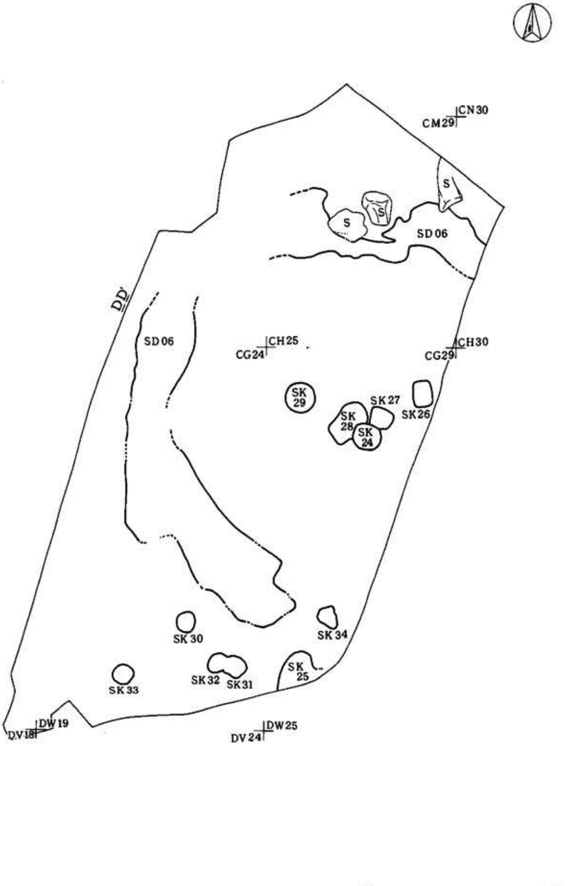
第5図　調査区及びグリット図


CQ49
CP48
CK49
CJ48
SD
04
CK39
CJ38
CJ42
A
A'
SM 01
SB19
SD
02
SD
01
SB
18
SK
10
CE39
CD38
CE43
CD42
SD 05
0
10m

第6図　Ⅰ・Ⅳ区全体図


DU39
DT38
SB23
B
B'
SB21
SB 20
SK11
SK 12
SB 22
DN30
DM29
DN39
DM38
SK23
撹乱
SK 35
SB 26
SB25
SD 03
SK 20
SK 22
撹乱
SB 28
SK21
SK 16
SK 19
SK 14
SK 13
SD07
SK 15
SK 18
SB30 カマド
SB31 カマド
SK 36
SB 24
SB 27
C
C'
SK 17
SB29
DA30
CY29
0
10m

第７図　Ⅱ・Ⅲ区全体図


CN30
CM29
S
S
S
SD06
DD'
SD06
CH25
CG24
CH30
CG29
SK 29
SK27
SK26
SK 28
SK 24
SK30
SK34
SK 25
SK33
SK32
SK31
DW19
DV18
DW25
DV24
0
10m

第8図　Ⅵ区全体図

第2節　遺構と遺物

1. 竪穴住居址（ＳＢ）

（1）縄文時代

①ＳＢ18（第９・37図　写真図版４・31）

遺　構　Ｉ区で検出した。住居址の西側半分が調査区外となるため、確認できたのは全体の1/3程度である。平面的には他の遺構と切り合い関係は確認されないが、土層断面では本址の上に異なる時期の住居址床面（第９図Ａ－Ａ′５層）が観察できる。

最大規模は南北方向3.2ｍで円形を呈する。主軸方向は不明。床面は地山を掘り込んでおり、中央は堅く締まっている。壁高は検出面から床面まで10㎝程度で、壁はやや傾斜する。柱穴とみられるのはＰ１～３で、一部周溝を確認した。

住居址内の北隅に炭化物と焼土が確認でき、炉址ともみられるが、後世のピットに切られており不明である。

遺　物　覆土内からわずかであるが、縄文土器片（第37図―１～４）が出土している。１・３は半截竹管による沈線文、２は半截竹管による矢羽状沈線を地文とし棒状貼付文、４は縄文施文である。

時　期　覆土内の出土遺物から縄文時代前期後半の可能性がある。

②ＳＢ19（第９・37図　写真図版４・31）

遺　構　Ｉ区で検出した。確認できたのは炉址のみで、ＳＤ02に切られる。周囲で本址の柱穴を確認できず、規模・主軸方向は不明である。

炉址は地床炉で上部をＳＤ02に削られているため規模は不明であるが、南北50×東西40㎝の範囲に炭化物・焼土が集中する。

遺　物　炉址内から出土した縄文土器片（第37図―５）は、半截竹管による横位と矢羽状沈線が施されている。

時　期　出土遺物はわずかであるが、炉址内の遺物から縄文時代前期後半の可能性がある。

③ＳＢ21（第９図　写真図版４）

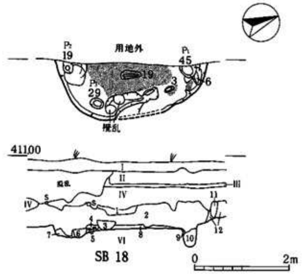
遺　構　Ⅱ区で検出した。住居址の南東側半分が調査区外となるため、確認できたのは全体の2/3程度である。他の遺構と切り合い関係はない。

最大規模は南北方向3.9ｍで円形を呈する。主軸方向は不明。床面は地山を掘り込むが、遺構検出面が耕土直下のため全体に撹乱が及んでいることから、床面・柱穴等を明確に把握できなかった。壁高は検出面から床面まで10㎝程度で、壁はやや傾斜する。

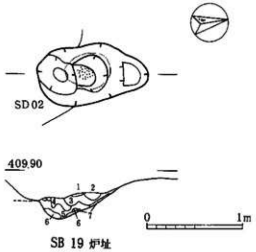
住居址内の南側に焼土の散布がみられるが、炉址等は把握できない。

遺　物　覆土内から縄文土器片がわずかに出土しているが、小破片のため図化できない。

時　期　覆土内の遺物は少ないが、縄文時代とみられる。



SB 18



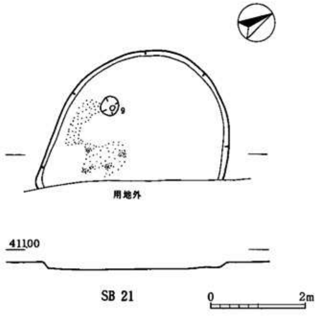
SB 19 炉址

SB19

1	焼土			
2	7.5YR 4/2 灰褐色土　炭化物含む	CL	しまりあり	粘性なし
3	7.5YR 3/2 黒褐色土　炭化物含む	CL	しまりあり	粘性なし
4	7.5YR 3/3 暗褐色土	CL	しまりあり	粘性なし
5	7.5YR 3/4 暗褐色土　7.5YR　7/8　黄橙色土ブロック含む	CL	しまりあり	粘性なし
6	7.5YR 4/4 褐色土	SL	しまりあり	粘性なし
7	7.5YR 4/6 褐色土	SL	しまりあり	粘性なし

SB18

I	造成盛土				(基本層序)
II	耕土(田)				(基本層序)
III	耕土(床土)				(基本層序)
IV	10YR 3/2 黒褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし	(基本層序)
1	10YR 3/3 暗褐色土　10YR　7/6　明黄褐色土40%含む	SCL	しまりあり	粘性なし	
2	10YR 2/3 黒褐色土	SCL	しまりあり	粘性ややあり	
3	10YR 3/3 暗褐色土　10YR　7/6　明黄褐色土10%含む	SCL	しまりあり	粘性なし	
4	10YR 8/6 黄橙色土	SCL	しまりあり	粘性あり	
5	10YR 3/1 黒褐色土　炭化物・焼土含む	SCL	しまりあり	粘性あり	(住居址床面の可能性)
6	10YR 3/4 暗褐色土	SCL	しまりあり	粘性ややあり	
7	10YR 4/4 褐色土	SCL	しまりあり	粘性あり	(SB18覆土)
8	10YR 2/2 黒褐色土　10YR　8/8　黄橙色土3%含む	SCL	しまりあり	粘性ややあり	(SB18覆土)
9	10YR 2/2 黒褐色土　10YR　8/8　黄橙色土5%含む	SCL	しまりあり	粘性ややあり	(SB18覆土)
10	10YR 4/3 にぶい黄褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし	(SB18覆土)
11	10YR 2/1 黒色土	SCL	しまりあり	粘性ややあり	
12	10YR 4/4 褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし	
VI	10YR 6/8 明黄褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし	(基本層序・地山)



SB 21

第9図　SB18・SB19炉址・SB21

(2) 弥生時代

①ＳＢ20（第10・37図　写真図版５・７）

遺　構　Ⅱ区で検出した。住居址の北西側1/10程度が調査区外となる。ＳＫ12に切られる。最大規模は東西方向4.7mで隅丸方形を呈する。主軸方向はN37°W。床面は地山を掘り込み、全体に堅く締まっている。壁高は検出面から床面まで10cm程度で、壁はやや傾斜する。主柱穴は４本（Ｐ１～Ｐ４）あり、住居址の北西側に土器埋設炉がある。覆土は単層で10YR　3/3　暗褐色土を呈する。

土器埋設炉は甕の胴部を用いたもので、炉縁石はない。掘り方規模は32×22cm で楕円形を呈する。

遺　物　出土遺物はいずれも弥生土器（第37図―６・７）である。６は炉址の埋設土器で上半部及び底部を欠き、胴部も1/2程度があるのみである。７の小型土器は主柱穴（Ｐ２）から出土したもので、文様はなく手づくねによるもので甕の模造品とみられる。

時　期　炉址内等の遺物から弥生時代後期後半とみられる。

②ＳＢ22（第10・37・47図　写真図版６・７・31）

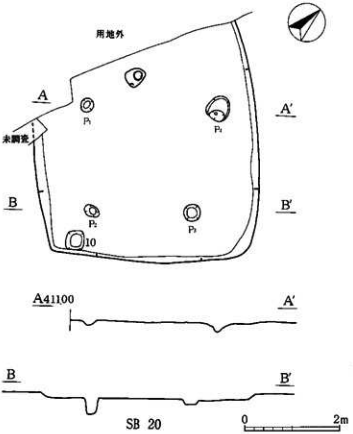
遺　構　Ⅱ区で検出した。住居址の東隅が調査区外となるがほぼ全体を把握した。ＳＫ12に切られる。規模は東西4.0m×南北4.0mで隅丸方形を呈する。主軸方向はN139°E。床面は地山を掘り込んでおり、ほぼ全面が堅くたたき締められている。床面上には直径25～27cm の円形で、深さ１～３cm 程度のごく浅いくぼみが５箇所で確認された。この部分も床面同様に堅く、床のたたき締め痕跡の可能性も考えられる。壁高は検出面から床面まで35cm で、壁はやや傾斜する。主柱穴は４本（Ｐ１～Ｐ４)、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ４の形状から先の尖った割り材を使用している可能性がある。周溝は南東側壁下にある。住居址の南東側、Ｐ１とＰ４の間に土器埋設炉がある。ＳＫ12に切られている部分に一部土手状の高まりが残っていることから、この部分に入口施設があった可能性がある。この入口施設と炉址の間、ほぼ主軸線上に３つの小柱穴がある。同様のものは同時期の住居址でみられ、用途として間仕切り施設が想定されている。本址の場合は中央の柱穴上部に台石状の石が据えられている。

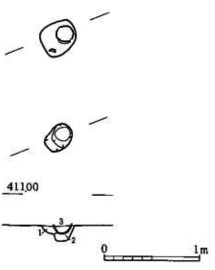
土器埋設炉は甕ほぼ一個体を用いたもので、炉縁石はない。掘り方規模は50×40cm で円形を呈する。

遺　物　出土遺物はいずれも弥生土器（第37図―８～10）である。８はハの字に広がる弥生土器の高坏脚部、９は波状文を施した壷の上半部で、いずれも覆土内から出土したものである。10は炉址内に埋設された甕で口縁部の一部を欠くがほぼ完形である。文様はなく、底部に焼成後穿孔が施されている。

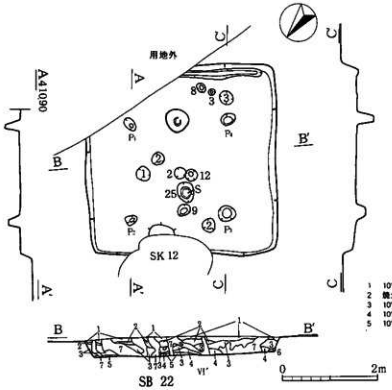
石器（第47図―１～５）は、１が硬砂岩製の打製石斧、２が硬砂岩製の抉入打製石庖丁、３が砂岩製の砥石、４・５が黒曜石製・下呂石製の石鏃である。

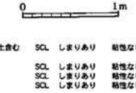
時　期　炉址内等の遺物から弥生時代後期後半とみられる。





1	7.5YR 3/3 暗褐色土　全体に焼土を含む	SCL	しまりあり	粘性なし
2	10YR 3/1 黒褐色土	SCL	しまりあり	粘性ややあり
3	10YR 3/2 黒褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし





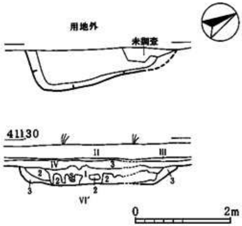
1	10YR 3/3 暗褐色土　焼土含む	SCL	しまりあり	粘性なし
2	焼土			
3	10YR 3/2 黒褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし
4	10YR 3/1 黒褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし
5	10YR 2/2 黒褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし

1	耕土(床土)				
2	10YR 3/4 暗褐色土	SL	しまりあり	粘性なし	(SB22覆土)
3	10YR 4/3 にぶい黄橙色土	SL	しまりあり	粘性なし	(SB22覆土)
4	10YR 3/3 暗褐色土	SL	しまりあり	粘性なし	(SB22覆土)
5	10YR 4/6 褐色土	SL	しまりあり	粘性なし	(SB22覆土)
6	10YR 3/2 黒褐色土　10YR　5/6　黄褐色土ブロック含む	SL	しまりあり	粘性なし	(SB22覆土)
7	10YR 3/1 黒褐色土	SL	しまりあり	粘性なし	
VI′	10YR 7/6 明黄褐色土	S	しまりあり	粘性なし	(基本層序・地山)

第10図　SB20・SB22

(3) 古墳時代

①ＳＢ23（第11図）



II	耕土(田)					(基本層序)
III	耕土(床土)					(基本層序)
IV	10YR 3/2	黒褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし	(基本層序)
1	10YR 3/1	黒褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし	
2	10YR 4/3	にぶい黄橙色土	SCL	しまりあり	粘性なし	(SB23覆土)
3	10YR 2/3	黒褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし	(SB23覆土)
VI'	10YR 7/6	明黄褐色土	S	しまりあり	粘性なし	(基本層序・地山)

第11図　SB23

遺　構　Ⅱ区で検出した。他の遺構と切り合い関係はない。住居址の西側が調査区外となり、全体の1/4程度を確認したのみである。土層断面の観察から、規模は３ｍ程度とみられる。柱穴等は確認できず、主軸方向は不明である。壁高は検出面から床面まで15cm で、壁はやや傾斜する。

遺　物　覆土内から土師器片がわずかに出土しているが、小破片のため図化できない。

時　期　覆土内の遺物は少ないが、古墳時代の可能性がある。

②ＳＢ25（第12・38図　写真図版７・８・32）

遺　構　Ⅲ区で検出した。住居址の東側が調査区外となり、全体の1/2程度を確認した。ＳＤ03を切る。

規模は南北方向約3.5ｍで隅丸方形を呈する。主軸方向はN90°W。床面は地山を掘り込む。壁高は検出面から床面まで15cm 程度で、壁はやや傾斜する。柱穴は把握できなかった。西側壁の北寄りに石芯粘土カマドがある。

石芯粘土カマドは花崗岩自然石を用いたもので、袖石左右各３石と落ち込んだ状態の天井石１石が残る。煙道がＳＢ26の方に延びているとみられるが把握できなかった。カマド本体の規模は1.1×0.9ｍで、主軸方向はN83°Wとなる。カマド内には自然石の支脚があり、焼土は支脚の周囲にわずかに残る程度で、底部にも焼土は残っていない。カマドの左脇には甕が据えられていたが、この部分での煮炊き痕跡はないことから、カマド脇の貯蔵穴といった機能をもつ可能性もある。

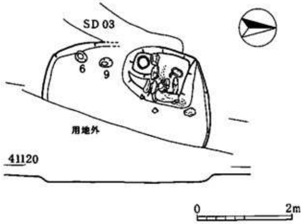
遺　物　出土遺物はいずれも土師器（第38図―１～５）である。３は甕でカマド脇に据えられていたものである。口縁部は欠損していたが胴部は完存しており、外面にススが付着している。１は杯、２は小型甕、４・５の甕はカマド内からの出土であるが、元位置を留めていないものである。

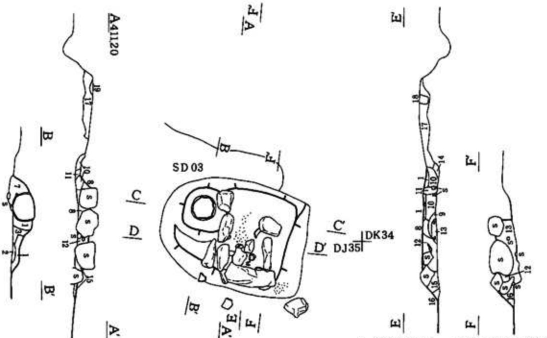
時　期　カマド内及びその周辺の遺物から古墳時代中期後半（５世紀後半）とみられる。

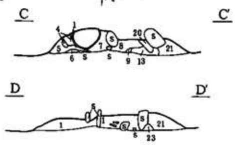
③ＳＢ26（第13・14・38・47図　写真図版７・９・32）

遺　構　Ⅲ区で検出した。西側の一部が調査区外となるが、ほぼ全体を把握できた。ＳＫ23を切る。

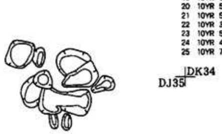
規模は東西5.15×南北4.6～4.9ｍで隅丸方形を呈する。主軸方向はN82°W。床面は地山を掘り込み、堅くたたき締められている。壁高は検出面から床面まで30cm で、壁はやや傾斜する。主柱穴は４本（Ｐ１～Ｐ４）、周溝はカマドのある西側壁を除いて全周する。カマドは西側壁のほぼ中央に石芯粘土カマド（西カマド）があるが、東側壁際でも焼土・炭化物が確認できることから、ここにも何らかの煮炊き施設（東カマド）があったことが想定される。Ｐ５は入口施設、もしくは東カマドに関わる施設とみる







1	7.5YR 4/4	褐色土	鉄分の沈殿あり・炭化物やや含む	SCL	しまりあり	粘性ややあり	
2	10YR 4/3	にぶい黄褐色土	焼土やや含む	SCL	しまりあり	粘性ややあり	
3	7.5YR 4/1	褐灰色土	鉄分の沈殿あり	SCL	しまりあり	粘性なし	
4	10YR 4/4	褐色土		SCL	しまりあり	粘性ややあり	
5	10YR 4/2	灰黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性ややあり	
6	10YR 5/6	黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性ややあり	
7	10YR 3/2	黒褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
8	10YR 2/3	黒褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
9	10YR 2/3	黒褐色土	焼土20%含む	SCL	しまりあり	粘性なし	
10	10YR 3/4	暗褐色土	焼土2%含む	SCL	しまりあり	粘性なし	
11	10YR 2/1	黒色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
12	10YR 3/3	暗褐色土	焼土2%含む	SCL	しまりあり	粘性なし	
13	10YR 3/1	黒褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
14	10YR 4/4	褐色土	10YR 6/8 明黄褐色土10%含む	SCL	しまりあり	粘性なし	
15	10YR 2/2	黒褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
16	10YR 4/1	灰黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
17	10YR 3/2	黒褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
18	10YR 6/8	明黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
19	10YR 3/2	黒褐色土	10YR 6/8 明黄褐色土10%含む	SCL	しまりあり	粘性なし	
20	10YR 5/1	褐灰色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
21	10YR 5/2	灰黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
22	10YR 3/3	暗褐色土	10YR 6/6 明黄褐色土30%含む	SCL	しまりあり	粘性なし	(SD03覆土)
23	10YR 5/2	灰黄褐色土	10YR 5/8 黄褐色土ブロック10%含む	SCL	しまりあり	粘性なし	
24	10YR 4/1	褐灰色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
25	10YR 7/6	明黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	



第12図　SB25

こともできる。

西カマドは、支脚以外の石は残っていないが、掘り方に石の抜き取り痕跡が認められることから本来は石芯粘土カマドで、住居廃絶以降に破壊されたとみられる。カマド本体の規模は掘り方から1.15×1.0mで、主軸方向はN83°Wとなる。煙道は住居址壁面から外部に延びており、そのほとんどが調査区外となる。煙道の長さは調査時点で壁面から外に95cm程度が確認でき、さらに延びているとみられるが、確認した部分では上部に向かう傾斜はほとんどみられない。煙道の径は住居址壁面付近で30～36cm、奥が20cm程度となることから、外に向かうに従ってやや細くなるようである。カマド奥（煙道入口）に自然石が差し込まれていたが、用途は不明である。煙道内は焼けていた。

東カマドは、壁際に焼土と炭化物が残っていたことからカマドの痕跡と考えた。西側壁には周溝がないことから西カマドが当初から設置されたカマドと考えられる。東側にもカマドがあったとすれば、副次的なものとみることもできる。

遺　物　出土遺物はいずれも土師器（第38図―6～20）である。6は西カマドの脇から出土した蓋でつまみが付き、表面はミガキが施された丁寧な作りのものである。須恵器の有蓋高杯の蓋を模したものと考えられるが、身の部分は確認できなかった。7・8は杯、9・10は高杯脚部、11は単孔の甑で底部のみ、12は壷、13～16は外側にススの付着がみられる大小の甕で床面を中心に出土している。17・18は西カマド内から出土した甕でいずれも小破片のもの、19・20は東カマド付近から出土した甕である。

石器（第47図―6～8）は、6・7が硬砂岩製の打製石斧、8が泥岩製の砥石である。東カマド周辺から編物石6点（硬砂岩製5・緑色岩製1）が出土している。図化していないが、各石の大きさと重量は以下のとおりである。①長さ13cm・重さ484g　②長さ12.5cm・重さ232g　③長さ15cm・重さ605g　④長さ16cm・重さ448g　⑤長さ8.5cm（欠損）・重さ342g（以上、硬砂岩製）、⑥長さ16cm（欠損）・重さ550g（以上、緑色岩製）である。

時　期　カマド及び床面出土の遺物から古墳時代中期末～後期初頭（5世紀末～6世紀初頭）とみられる。

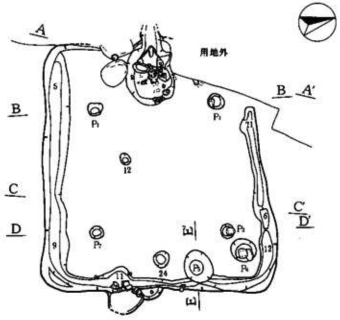
④ＳＢ27（第15・16・39・42・47図　巻頭図版2　写真図版10・32）

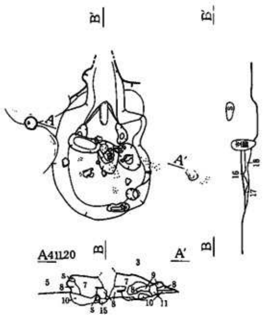
遺　構　Ⅲ区で検出した。後世の削平を受けているがほぼ全体を把握できた。ＳＢ29・ＳＢ31・ＳＫ17に切られる。

規模は他の遺構に切られているため東側壁が把握できなかったが、南北方向5.6mで隅丸方形を呈する。主軸方向はN12°E。床面は地山を掘り込んでおり堅い。壁高は検出面から床面まで10cm程度で、壁はやや傾斜する。主柱穴は4本（Ｐ1～Ｐ4）、周溝は西側が後世の削平のため途切れているが、ほぼ全周するとみられる。Ｐ1とＰ4との間に2箇所焼土を確認した。位置的に炉址1が本来のものとみられる。Ｐ6は入口施設である。

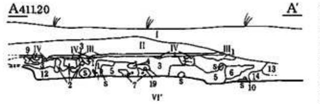
炉址はいずれも地床炉である。炉址1は掘り方規模70×30～35cmで不整楕円形、炉址2は掘り方規模45×35cmで楕円形を呈する。

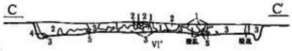
遺　物　遺物は東側に比較的多く残るが、本址を切るＳＢ31との混同があり得る。床面を中心に出土量は比較的多く、いずれも土師器（第39図―1～12）である。1・2の杯のうち、2は側面に墨書がある点が特筆される。墨書は文字や記号ではなく「～」状のものである。3の内黒杯は貼床下から出土し





西カマド



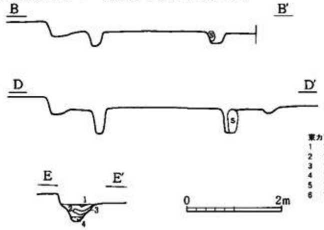


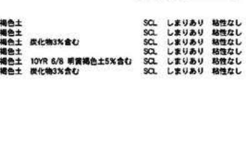
C-C'

1	10YR 4/4	褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし	
2	10YR 3/2	黒褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし	
3	10YR 2/1	黒色土	SCL	しまりあり	粘性なし	
4	10YR 4/6	褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし	
5	10YR 7/6	明黄褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし	
VI'	10YR 7/6	明黄褐色土	S	しまりあり	粘性なし	(基本層序・地山)

A-A'・西カマドA-A

I	造成盛土					(基本層序)
II	耕土(田)					(基本層序)
III	耕土(床土)					(基本層序)
IV	10YR 3/2 黒褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	(基本層序)
1	10YR 4/2 灰黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
2	10YR 2/1 黒色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
3	10YR 4/3 にぶい黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性ややあり	(SB26貼土)
4	10YR 4/4 褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	(SB26貼土)
5	10YR 3/3 暗褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	(SB26貼土)
6	10YR 3/4 暗褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	(SB26貼土)
7	10YR 4/6 褐色土	焼土・炭化物3%含む	SCL	しまりあり	粘性なし	(SB26西カマド)
8	10YR 4/6 褐色土	焼土20～30%含む	SCL	しまりあり	粘性なし	(SB26西カマド)
9	10YR 5/2 灰黄褐色土	灰含む	SCL	しまりあり	粘性なし	(SB26西カマド)
10	10YR 7/8 黄橙色土	10YR 3/2 黒褐色土10%含む	SCL	しまりあり	粘性なし	(SB26西カマド)
11	10YR 3/2 黒褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	(SB26西カマド)
12	地山に掘り込まれたSB26の壁					
13	10YR 5/6 黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
14	地山 (VI' 層)					
15	10YR 4/4 褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	(支脚)
16	10YR 3/2 黒褐色土	焼土・炭化物10%含む	SCL	しまりあり	粘性なし	
17	10YR 7/8 黄橙色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
18	10YR 4/6 褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
19	焼土					
VI'	10YR 7/6 明黄褐色土		S	しまりあり	粘性なし	(基本層序・地山)





東カマド

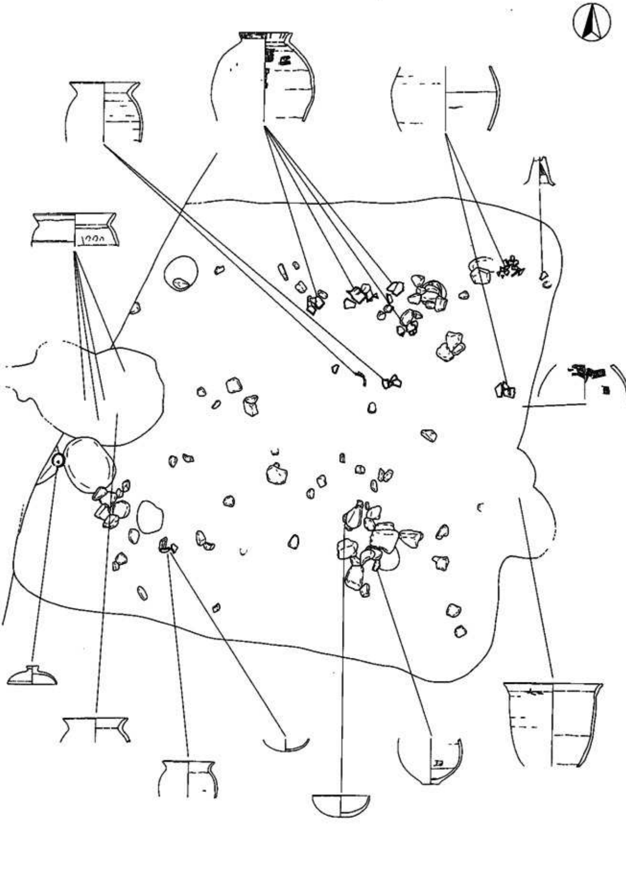
東カマドC-C'

1	10YR 3/3 暗褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし
2	10YR 5/6 黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし
3	10YR 3/4 暗褐色土	炭化物3%含む	SCL	しまりあり	粘性なし
4	10YR 3/2 黒褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし
5	10YR 3/2 黒褐色土	10YR 6/8 明黄褐色土5%含む	SCL	しまりあり	粘性なし
6	10YR 2/2 黒褐色土	炭化物3%含む	SCL	しまりあり	粘性なし

E-E'

1	10YR 3/4 暗褐色土	焼土・炭化物含む	SCL	しまりあり	粘性なし
2	10YR 3/3 暗褐色土		SCL	しまりあり	粘性ややあり
3	10YR 4/4 褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし
4	10YR 2/3 黒褐色土		SCL	しまりあり	粘性ややあり

第13図 SB26

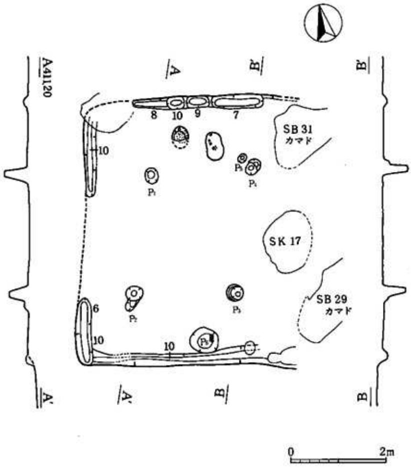


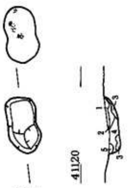
第14図　SB26　遺物出土状況

ている。４は口縁部で丁寧なミガキが施され、須恵器の𤭯を模倣したものとみられる。５は小型壷、６の壷は入口施設とみられるＰ６内から出土している。７の甕は炉址１から出土したもので、他に大小の甕（８～12）がある。このうち９は頸部がやや窄まるが外面にススの付着があることから甕とした。12の甕は下半部のみで伏せられた状態で出土したものである。胴部下に焼成後穿孔が施されており、底部にはトチン状のものが５箇所に付いている。

石器（第47図－９～11）は、９が緑色岩製打製石斧、10が表面に擦痕があることから台石ないし砥石とみられるもの、11は床面から出土した石皿である。

時　期　出土遺物から古墳時代中期後半（５世紀後半）とみられる。

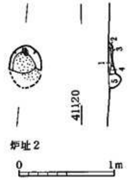




炉址１

炉址1

1	10YR 2/2 黒褐色土	焼土・炭化物10%含む	SCL	しまりあり	粘性なし
2	10YR 3/2 黒褐色土		SCL	しまりあり	粘性ややあり
3	10YR 6/8 明黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし
4	10YR 3/3 暗褐色土	10YR 6/8 明黄褐色土5%含む	SCL	しまりあり	粘性なし
5	10YR 3/1 黒褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし

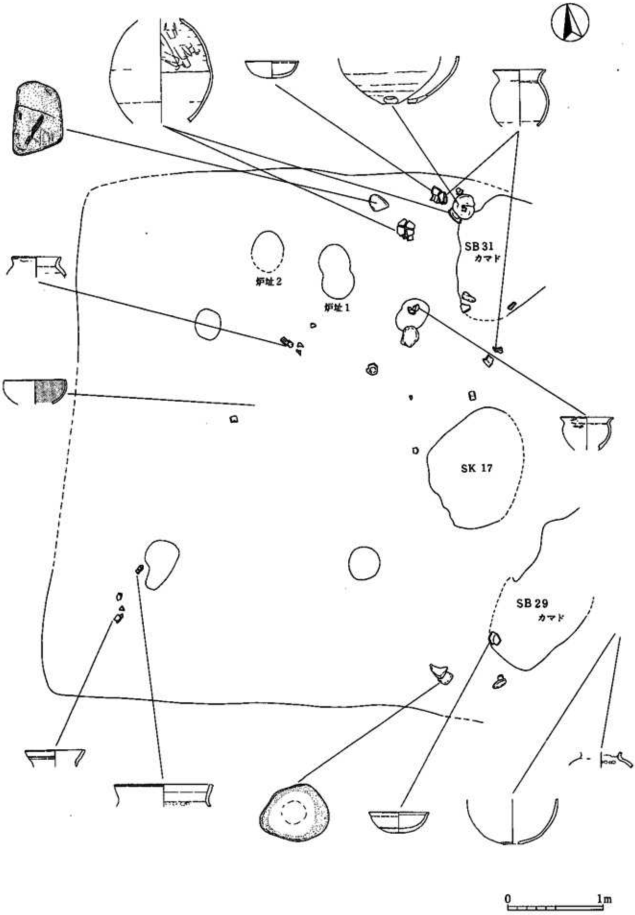


炉址２

炉址2

1	焼土				
2	10YR 3/2 黒褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし
3	10YR 6/8 明黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし
4	10YR 2/3 黒褐色土	炭化物5%含む	SCL	しまりあり	粘性なし
5	10YR 2/2 黒褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし

第15図　SB27



第16図　SB27　遺物出土状況

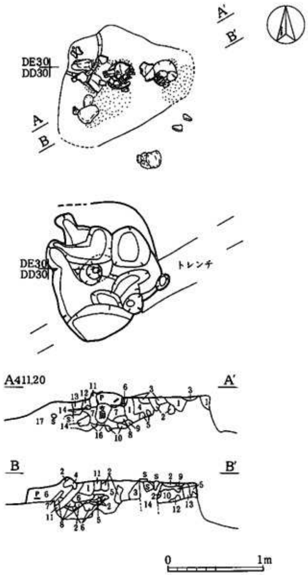
⑤ＳＢ31（第17・39図　写真図版11・32）

遺　構　Ⅲ区で検出した。遺構検出時に把握できず、ＳＢ27を掘り下げる時点でカマドの存在を確認した。そのため、ＳＢ27に伴う可能性も考えたが、ＳＢ27に炉址があること、カマドの方向やその位置が住居の北東隅にあたることなどから別の住居址とした。カマドの掘り方はＳＢ27の床面を掘り込んでいる。カマドの周囲で本址に対応する床面・柱穴を特定できず規模は不明である。

カマドは、自然石の支脚の上に据えられた土師器甕とこの西側にある２石との間に焼土が厚く残っていたことからここが焚き口となり、この２石は袖石とみられる。石は他には残っていないが、本来前端部の袖石のみが据えられていた可能性もある。これにより、西側に焚き口を向けた主軸方向N82° Ｅの石芯粘土カマドと考えられる。本体規模は推定で1.2×0.7ｍである。

遺　物　いずれもカマド内から出土したもので土師器（第39図―13～18）である。13～15の杯・内黒杯はいずれも丁寧なミガキが施されている。17の甕は支脚の上から出土したもので内外面にススの付着がみられる。図化の1/3程度が残るのみである。16の甕も胴部に炭化物の付着が認められる。18の甕はＳＢ27の覆土出土の破片と接合している。

時　期　カマド内の出土遺物から古墳時代中期末～後期初頭（５世紀末～６世紀初頭）とみられる。



A-A'

1	10YR 3/2 黒褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
2	10YR 4/3 にぶい黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
3	10YR 3/3 暗褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	(煙道か)
4	7.5YR 3/4 暗褐色土	全体に焼土含む	SCL	しまりあり	粘性なし	(カマド)
5	10YR 6/6 明黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	(カマド)
6	10YR 5/4 にぶい黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	(カマド)
7	10YR 4/4 褐色土	炭化物・焼土3％含む	SCL	しまりあり	粘性なし	(カマド)
8	10YR 2/2 黒褐色土		SCL	しまりあり	粘性あり	(カマド)
9	10YR 2/3 黒褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	(カマド)
10	10YR 5/6 黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	(カマド)
11	10YR 4/6 褐色土	焼土ブロック含む	SCL	しまりあり	粘性なし	(カマド)
12	10YR 5/8 黄褐色土	焼土3％含む	SCL	しまりあり	粘性なし	(カマド)
13	10YR 4/4 褐色土	焼土3％含む	SCL	しまりあり	粘性なし	(カマド)
14	焼土					
15	10YR 4/2 灰黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性ややあり	
16	10YR 3/4 暗褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
17	10YR 4/4 褐色土	灰含む	SCL	しまりあり	粘性なし	

B-B'

1	焼土					
2	7.5YR 4/4 褐色土	焼土50％含む	SCL	しまりあり	粘性なし	
3	7.5YR 4/3 褐色土	焼土5％含む	SCL	しまりあり	粘性なし	
4	10YR 7/8 黄橙色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
5	10YR 3/3 暗褐色土	焼土3％含む	SCL	しまりあり	粘性なし	
6	10YR 5/4 にぶい黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
7	10YR 5/4 にぶい黄褐色土	10YR 5/6 黄褐色土含む	SCL	しまりあり	粘性なし	
8	10YR 3/2 黒褐色土		SCL	しまりあり	粘性ややあり	
9	10YR 8/8 黄橙色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
10	10YR 4/3 にぶい黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性ややあり	
11	10YR 3/1 黒褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
12	10YR 7/8 黄橙色土	10YR 3/2 黒褐色土含む	SCL	しまりあり	粘性なし	
13	7.5YR 4/4 褐色土		SCL	しまりあり	粘性ややあり	
14	10YR 4/1 褐灰色土		SCL	しまりあり	粘性なし	(小ピット)

第17図　SB31

（4）平安時代

①ＳＢ24（第18・40・47図　写真図版12・36）

遺　構　Ⅲ区で検出した。住居址の東側が調査区外となり、全体の2/3程度を確認した。ＳＢ29を切り、ＳＫ36に切られる。

規模は、南北方向3.6～3.7mで隅丸方形を呈する。壁高は検出面から床面まで35cmで、壁はやや傾斜する。主柱穴は２本（Ｐ１・Ｐ２）を確認した。床面は地山を掘り込んでおり、壁際まで極めて堅くたたき締められており周溝はない。東側の土層断面で焼土がわずかに確認できたことから、東側壁にカマドがあるとすれば主軸方向は推定でN110°Ｅとなる。反対の西側壁際の溝は入口施設の可能性もある。

遺　物　覆土内を中心とするが比較的多い。ロクロ土師器・黒色土器（第40図―１～６・14・15）・須恵器（同図―７～９・16）・灰釉陶器（同図―10～13・17）がある。

１・２はロクロ土師器杯の回転糸切り底部破片である。３の黒色土器杯は東壁際からほぼ完形で出土した。ほかに４の黒色土器杯、５・６の黒色土器皿・椀があるがいずれも底部破片である。７の須恵器杯は軟質のものである。８・９の須恵器杯は回転糸切り底部破片である。10～12の灰釉陶器皿はいずれもハケ塗り施釉のもので硯に転用されたとみられる擦れ等の痕跡がある。10は三日月高台をもち、高台の内側に墨痕がある。11・12も内面に墨痕がある。13は灰釉陶器椀でハケ塗り施釉である。14・15の土師器甕はロクロ調整によるカキメが施されている。16の須恵器甕は広口甕の大型品とみられるが底部破片のみが出土。17の灰釉陶器手付瓶で把手のみの復元実測のため精度は欠くが大型品である。

刀子（第47図―12）は東壁際から出土したものである。

時　期　覆土内の出土遺物から平安時代（９世紀後半）とみられる。

②ＳＢ28（第18・40・42図　巻頭図版２　写真図版14・34）

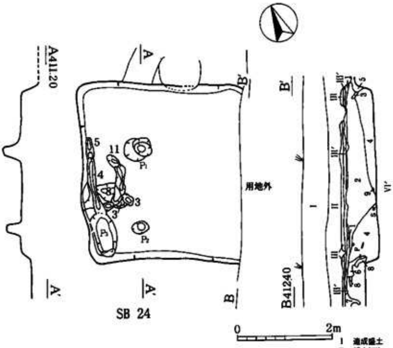
遺　構　Ⅲ区で検出した。住居址の東側が調査区外となり、全体の3/4程度を確認した。ＳＫ19を切り、ＳＫ13～15・18・ＳＤ07に切られる。

規模は南北方向4.5mで隅丸方形を呈する。壁高は検出面から床面まで20cm程度で、壁はやや傾斜する。主柱穴・周溝は確認できない。床面は地山を掘り込み、地山の巨石を削り成形している。床面は貼床によるもので極めて堅くたたき締められている。ＳＫ19はこの貼床の下で確認された。東側床面上に焼土・炭化物がありカマドの存在が想定されるが、土層断面でカマド痕跡が確認できないことから、住居廃絶後に壊されているとみられる。東側壁にカマドがあるとすれば、主軸方向は推定でN97°Ｅとなる。

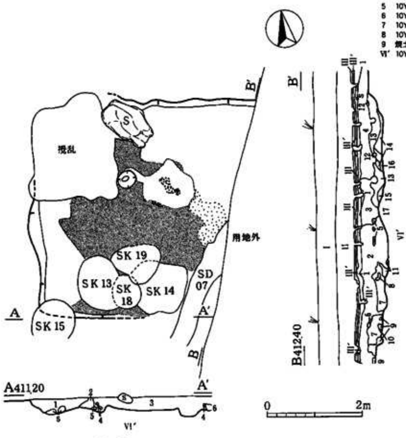
当初住居址として把握できず、結果として極めて堅い床面から範囲を特定した。そのため遺物も最終的には床面の範囲から出土したものを本址に伴うものとしている。

遺　物　ロクロ土師器・黒色土器（第40図―18～21）・須恵器（同図―22～24）・灰釉陶器（同図―25～30）・緑釉陶器（同図―31）がある。

18はロクロ土師器杯、19・20の黒色土器杯はいずれも側面に墨書があるが、文字を特定できない。21の黒色土器椀は高台のみ、22～24の須恵器杯はいずれも回転糸切り底で、22・23は軟質である。25・26の灰釉陶器皿はいずれもハケ塗り施釉で三日月高台をもつ。26は内面にやや擦れたような痕跡があり転用硯の可能性があるほか、内面及び高台に重ね焼き痕跡がある。27の灰釉陶器椀はハケ塗り施釉、28の



I	造成盛土					(基本層序)
II	耕土(田)					(基本層序)
III	耕土(床土)					(基本層序)
III'	耕土(床土)					(基本層序)
1	10YR 4/2 灰黄褐色土	鉄分の沈殿あり	SCL	しまりあり	粘性なし	
2	10YR 3/2 黒褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
3	10YR 6/1 褐灰色土		SCL	しまりあり	粘性ややあり	
4	10YR 4/3 にぶい黄褐色土	鉄分の沈殿あり・焼土ややあり	SCL	しまりあり	粘性なし	(SB24覆土)
5	10YR 5/8 黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
6	10YR 3/3 暗褐色土		SCL	しまりあり	粘性ややあり	
7	10YR 4/3 にぶい黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性ややあり	
8	10YR 4/4 褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
9	焼土					
VI'	10YR 7/6 明黄褐色土		S	しまりあり	粘性なし	(基本層序・地山)



B−B′

I	造成盛土					(基本層序)
II	耕土(田)					(基本層序)
III	耕土(床土)					(基本層序)
III'	耕土(床土)					(基本層序)
1	10YR 3/3 暗褐色土	鉄分の沈殿あり	SCL	しまりあり	粘性なし	
2	10YR 3/3 暗褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
3	10YR 3/2 黒褐色土		SCL	しまりあり	粘性ややあり	
4	10YR 2/2 黒褐色土		SCL	しまりあり	粘性ややあり	
5	10YR 3/3 暗褐色土焼土・炭化物含む		SCL	しまりあり	粘性なし	
6	10YR 4/4 褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
7	10YR 4/3 にぶい黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性ややあり	
8	10YR 4/2 灰黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性ややあり	
9	10YR 5/8 黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
10	10YR 6/6 明黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
11	地山(SD07の壁)					
12	10YR 5/6 黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
13	10YR 4/6 褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
14	10YR 4/6 褐色土	10YR 7/6 明黄褐色土10%含む	SCL	しまりあり	粘性なし	
15	10YR 4/6 褐色土	焼土・炭化物含む	SCL	しまりあり	粘性なし	
16	10YR 6/6 明黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
17	焼土(SB28カマド痕跡)					
VI'	10YR 7/6 明黄褐色土		S	しまりあり	粘性なし	(基本層序・地山)

A−A′

1	10YR 3/2 黒褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし	(SK15覆土)
2	10YR 3/4 暗褐色土	SCL	しまりあり	粘性あり	
3	10YR 3/3 暗褐色土	SCL	しまりあり	粘性あり	
4	10YR 5/6 黄褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし	
5	焼土				
6	10YR 4/6 褐色土	SCL	しまりあり	粘性あり	
VI'	10YR 7/6 明黄褐色土	S	しまりあり	粘性なし	(基本層序・地山)

第18図　SB24・SB28

灰釉陶器輪花椀はハケ塗り施釉で輪花の一部が残る。29の灰釉陶器段皿はハケ塗り施釉、30の灰釉陶器耳皿は回転糸切り底でハケ塗り施釉、片方の耳を欠く。31は緑釉陶器椀で底部のみであるが、内外面及び高台にも釉薬がかかっている。

時　期　覆土内の出土遺物から平安時代前期（9世紀後半）とみられる。

③ＳＢ29（第19・41・42図　巻頭図版3　写真図版15・35）

遺　構　Ⅲ区で検出した。北側はＳＢ24に切られており、カマドと南側壁の一部が確認できたのみで規模は不明である。主軸方向は推定でN67°W。壁高は検出面から床面まで10cm程度で、壁はやや傾斜する。主柱穴・周溝は確認できない。床面は地山を掘り込み貼床している。この貼床下からわずかであるが縄文土器が出土しており、かつて概期の遺構が存在したものとみられる。カマドは西側壁にある。

カマドは、焼けた大小礫や焼土が散在しており原形を留めていない。掘り方をみると石の抜き取り痕があり、火床は極めて良く焼けている。おそらく石芯粘土カマドと考えられる。

遺　物　カマド及びその周辺から出土しているが、元位置を留めるものではない。ロクロ土師器・黒色土器（第41図―1～9・12・13）・須恵器（同図―10・11・14）・灰釉陶器（同図―15）がある。

1・2のロクロ土師器杯は回転糸切り底のもので、2は側面に「金」の墨書がある。3～8の黒色土器杯は回転糸切り底のもので、4～7に墨書があるがいずれも文字の一部分である。4は底部に「亠」、5は側面に「一」、6は側面に「𠄌」、7は側面に「亠」が残るのみで文字は不明である。9の黒色土器椀は高台のみである。10・11の須恵器杯は回転糸切り底のもので、11は高台がないが器形としては皿に近く、軟質で胎土に石が多く混じる。12・13の土師器甕のうち、12はハケ調整のもので底部と内面にススが付着し、下半部は二次的に火を受けた痕跡がある。13はハケ調整のもので底部に木葉痕があり、内面にススが付着している。14の須恵器大甕は破片のみ。15の灰釉陶器手付瓶は肩部に板状の把手が付くもので、ハケ塗り施釉である。

時　期　カマド及び覆土内の遺物から平安時代前期（9世紀後半）とみられる。

④ＳＢ30（第19・41図　写真図版16・36）

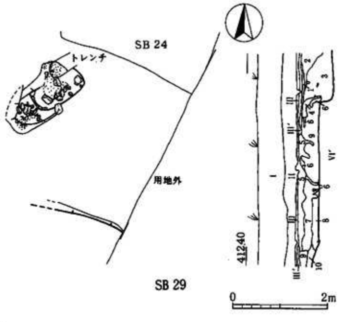
遺　構　Ⅲ区で検出した。ＳＫ16に切られる。西側が調査区外となり、東側は表土剥ぎの際に削平してしまったことから、カマドと床面の一部を確認したのみで規模は不明である。本址の床面は地山を掘り込むのではなく、本址の南側にあるＳＢ27の上に貼床しているものと考えられるが、ＳＢ27上の貼床は後世の造成により削平されている。

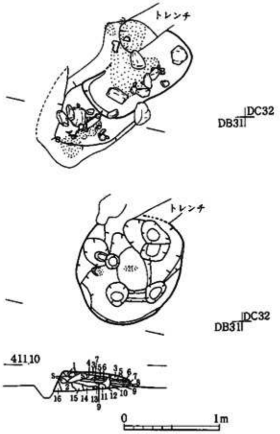
カマドの掘り方で石の抜き取り痕は確認できなかったが、石が散在していることから石芯粘土カマドと考えられる。カマド周辺から遺物が出土するが、カマドは住居廃絶後に壊されているとみられる。床面の残存状況から西側が焚き口となると考えられることから主軸方向は推定でN107°Eとなる。

遺　物　カマド内から、須恵器（第41図―16・17）・灰釉陶器（同図―18・19）が出土している。

16の灰釉陶器皿はハケ塗り施釉であるが、高台まで釉薬がかかっている。内面に重ね焼き痕跡がある。17の灰釉陶器椀はハケ塗り施釉で三日月高台をもつ。18の須恵器壺は長頸壺とみられ、自然釉がかかる。16は須恵器大甕の破片で外面は平行タタキ、内面はナデ調整のものである。

時　期　カマド内の遺物から平安時代前期（9世紀後半）とみられる。



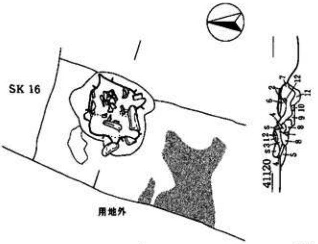


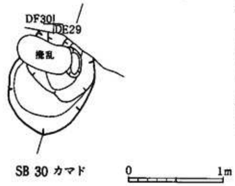
SB29

I		造成盛土					(基本層序)
II		耕土(田)					(基本層序)
III'		耕土(床土)					(基本層序)
III''		耕土(床土)					(基本層序)
1	10YR 4/2	灰黄褐色土	鉄分の沈殿あり	SCL	しまりあり	粘性なし	
2	10YR 3/2	黒褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
3	10YR 4/3	にぶい黄褐色土	鉄分の沈殿あり	SCL	しまりあり	粘性なし	(SB24覆土)
4	10YR 3/3	暗褐色土		SCL	しまりあり	粘性ややあり	
5	10YR 4/3	にぶい黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性ややあり	
6	10YR 4/4	褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
7	10YR 3/2	黒褐色土	焼土をわずかに含む	SCL	しまりあり	粘性あり	(SB29覆土)
8	10YR 4/4	褐色土		SCL	しまりあり	粘性あり	(SB29覆土)
9	10YR 3/1	黒褐色土	炭化物10%含む	SCL	しまりあり	粘性あり	(SB29覆土)
10	10YR 5/8	黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性あり	
VI'	10YR 7/6	明黄褐色土		S	しまりあり	粘性なし	(基本層序・地山)

SB29カマド

1	10YR 4/4	褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし
2	10YR 3/4	暗褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし
3	7.5YR 3/4	暗褐色土	焼土10%含む	SCL	しまりあり	粘性なし
4	10YR 4/6	褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし
5	10YR 6/8	明黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし
6	7.5YR 4/4	褐色土	焼土・炭化物5%含む	SCL	しまりあり	粘性なし
7	10YR 4/3	にぶい黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性ややあり
8	10YR 6/8	明黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし
9	10YR 3/3	暗褐色土	焼土・炭化物3%含む	SCL	しまりあり	粘性なし
10	10YR 3/2	黒褐色土	焼土・炭化物1%含む	SCL	しまりあり	粘性なし
11	10YR 5/6	黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし
12	10YR 4/2	灰黄褐色土	焼土・炭化物3%含む	SCL	しまりあり	粘性なし
13	10YR 7/8	黄橙色土		SCL	しまりあり	粘性なし
14	10YR 4/2	灰黄褐色土	10YR 7/8 黄橙色土10%含む	SCL	しまりあり	粘性なし
15	10YR 5/6	黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし
16	10YR 4/3	にぶい黄褐色土	10YR 6/6 明黄褐色土ブロック含む	SCL	しまりあり	粘性なし





SB30

1	10YR 3/3	暗褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし
2	10YR 4/2	灰黄褐色土	焼土50%含む	SCL	しまりあり	粘性なし
3	10YR 6/4	にぶい黄橙色土		SCL	しまりあり	粘性ややあり
4	10YR 3/1	黒褐色土		SCL	しまりあり	粘性ややあり
5	10YR 3/2	黒褐色土		SCL	しまりあり	粘性ややあり
6	10YR 5/4	にぶい黄橙色土		SCL	しまりあり	粘性なし
7	10YR 4/3	にぶい黄褐色土	10YR 7/6 明黄褐色土5%含む	SCL	しまりあり	粘性なし
8	10YR 3/4	暗褐色土	焼土5%含む	SCL	しまりあり	粘性なし
9	10YR 3/4	暗褐色土	10YR 7/8 黄橙色土5%含む	SCL	しまりあり	粘性なし
10	10YR 6/6	明黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし
11	10YR 5/3	にぶい黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし
12		焼土				

第19図　SB29・SB30カマド

2. 土坑（ＳＫ）

①ＳK10（第20・43・47図　写真図版17・38）

Ｉ区でほぼ全体を検出した。規模は南北方向で90cm、深さは10～20cmで円形を呈する。西側の覆土上層に小礫がある。出土遺物としては、第43図－１の縄文土器深鉢がある。下半部のみが残存し、胴部の一部に単節縄文が施された粗製土器である。内面にススの付着があり、胎土に金雲母を含む。残存部分がわずかのため詳細時期は不明である。第47図－13は緑色岩製打製石斧である。遺物の出土から縄文時代の土壙墓とみられる。

②ＳK11（第20・47図　写真図版17・38）

Ⅱ区で全体を検出した。規模は1.3×1.15m、深さは45～60cmで円形を呈する。わずかに縄文土器・弥生土器片が出土するほか、石器としては第47図－14～16がある。14は硬砂岩製の打製石斧、15は黒曜石製石鏃、16は黒曜石製石錐である。縄文時代の可能性がある。

③ＳK12（第20・47図　写真図版６・17・38）

Ⅱ区で全体を検出した。ＳB20・21を切る。規模は2.05×1.6m、深さは10～30cmで楕円形を呈する。底部付近には人頭大の平石、その上に握り拳大の石が不規則に配されている。覆土から縄文土器・弥生土器・須恵器の小破片のほか、第47図－17の黒曜石製石鏃が出土するが、時期は特定できない。

④ＳK13（第20・44図　写真図版18）

Ⅲ区で全体を検出した。ＳB28・ＳK19を切り、ＳK18に切られる。規模は1.15×0.85m、深さは25～35cmで円形を呈する。土坑内に小礫及び縄文土器・土師器・須恵器の小破片が出土する。黒色土器・須恵器が本址に伴うとみられる。第44図－１の黒色土器杯は回転糸切り底のもの、このほか図化していないが須恵器大甕片がある。時期は平安時代の可能性がある。

⑤ＳK14（第20図　写真図版18）

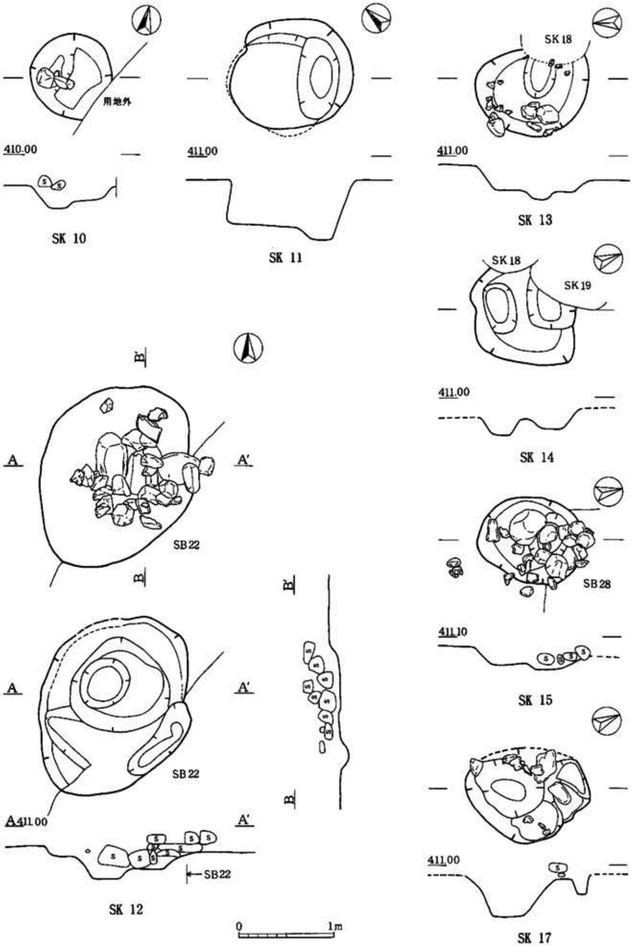
Ⅲ区で全体を検出した。ＳB28・ＳK19を切り、ＳK18に切られる。規模は1.05～1.25m、深さは20～25cmで不整形を呈する。土坑内からは縄文土器・土師器・須恵器の小破片が出土する。時期は切り合い関係から平安時代の可能性がある。

⑥ＳK15（第20図　写真図版18）

Ⅲ区で全体を検出した。ＳB28を切る。規模は1.15×0.87m、深さは20～25cmで円形を呈する。土坑内には握り拳大から人頭大の石が不規則に入っている。土坑内からは縄文土器・土師器・須恵器の小破片が出土する。時期は切り合い関係から平安時代以降とみられる。

⑦ＳK16（第21図　写真図版18）

Ⅲ区で検出した。ＳB30を切る。西側は調査区外で、規模は南北方向2.1～2.3m、東西方向は2.75m以



第20図　SK10～15・SK17

上になる。深さは最深部が55cmで長方形を呈する。土坑内からは小礫、縄文土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・陶器の小破片が出土するが、土坑の上半部に攪乱が及んでいることから時期は特定できない。

⑧ＳＫ17（第20図　写真図版17）

Ⅲ区で全体を検出した。ＳＢ27を切る。規模は1.3×1.0m、深さは20～45cmで楕円形を呈する。土坑内から小礫、土師器小破片が出土するのみで時期は不明である。

⑨ＳＫ18（第21・44図　写真図版18）

Ⅲ区で全体を検出した。ＳＢ28・ＳＫ13・ＳＫ14・ＳＫ19を切る。規模は70×55cm、深さは25cmで円形を呈する。人頭大の平石が据えられている。土師器甕（第44図―２）はハケ調整によるもの、灰釉陶器壷（同図―３）はハケ塗り施釉である。これらは石の間から出土している。出土遺物から平安時代の可能性がある。

⑩ＳＫ19（第21・43図　巻頭図版１　写真図版17・37）

Ⅲ区で全体を検出した。ＳＢ28・ＳＫ13・ＳＫ14・ＳＫ18に切られる。規模は1.0×0.9m、深さは30～40cmで不整形を呈する。縄文土器深鉢が３個体（第43図―２～４）出土している。２は諸磯ｃ式土器の深鉢である。平口縁のキャリパー形の器形で図化の1/8程度が残る。口縁部文様帯は、半截竹管の刺突がなされた棒状貼付文が等間隔に付けられ、貼付文の間にも同様の刺突が施される。胴部文様帯は、半截竹管による横位の沈線文による区画がなされ、その間に矢羽状沈線が施される。竹管の幅は５㎜程度である。内面はミガキが施され、胎土に石が多く混じる。３は粗製土器。平口縁のコップ形の器形で口縁部がわずかに内湾する。上半部と下半部とは接合せず、図化の1/2程度が残る。文様は口唇部に刻みが施され、上部は横位、下部は縦位の沈線が施される。胎土に金雲母を含む。４は口縁端部が欠損し、上半部と下半部とは接合しない。器形の特徴としては、底部の縁が張り出し、胴部は緩やかに立ち上がり、口縁部が内湾する。外面に条痕状の文様ないし調整がある。赤彩の痕跡が上部から下部にかけて残っており、本来は器面全体に塗布された可能性もある。胎土に石が多く、金雲母を含む。

時期は出土土器から縄文時代前期後半に比定され、土器の出土状況から土壙墓とみられる。

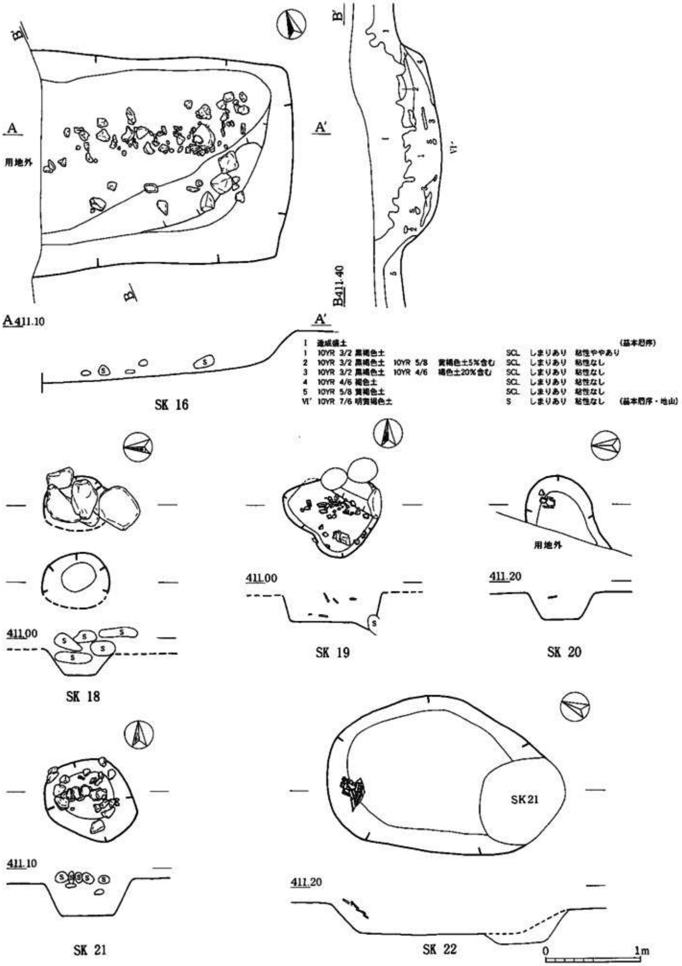
⑪ＳＫ20（第21・43図　巻頭図版１　写真図版21・37）

Ⅲ区で検出した。西側が調査区外となり、規模は南北方向で70cm、東西方向で90cm以上、深さは30cmで楕円形を呈するとみられる。縄文土器有孔浅鉢（第43図―５）が出土している。口縁部を欠き、図化の1/2程度が残る。お椀状の胴部から肩の部分が鍔状に張り出す。鍔の部分に４穴が確認でき、全体にあるとすれば16穴程度になる。内外面にミガキが施され、文様はない。胎土に金雲母を含む。

時期は出土土器から縄文時代前期後半に比定され、土壙墓とみられる。

⑫ＳＫ21（第21図　写真図版21）

Ⅲ区で全体を検出した。ＳＫ22を切る。規模は1.0×0.84m、深さは40cmで円形を呈する。覆土は漆黒土で土坑上部には焼けた握り拳大の礫が入っている。土器小破片のみで時期は不明である。



第21図　SK16・SK18～22

⑬ＳＫ22（第21・43図　巻頭図版１　写真図版20・37）

Ⅲ区で全体を検出した。ＳＫ22に切られる。規模は2.5×1.6m、深さ30cmで楕円形を呈する。土坑の北側壁際から縄文土器が出土している。出土状況から、意図的に破砕した上で破片を重ねるようにまとめて置かれたものと考えられる。

第43図―６は諸磯ｃ式土器の深鉢で、底部を欠き、図化の1/3程度が残る。器形は平口縁のキャリパー形で、胴部中央はやや内反りになり下半部がやや張り出す。推定で器高が60cm程度になる大型品で、器厚は７～８mm程度である。文様は、口縁部文様帯、胴部文様帯、胴下半部文様帯の大きく３つに分かれる。全周する半截竹管による横位の沈線文までが口縁部文様帯となる。地文は半截竹管による矢羽状沈線文で、口唇部には細い粘土紐を貼り付け、その上から縦の棒状貼付文が付けられる。これらには半截竹管による刺突が施される。棒状貼付文の間には１～２のボタン状貼付文が付けられるが、棒の間隔やボタンの数などは不規則である。胴部は半截竹管による縦位の沈線文による区画がなされ、その間に現状で３種の文様が施されている。①半截竹管による横位の沈線による区画の間に矢羽状文もしくは単節縄文を地文とした上に沈線を施すもの。②半截竹管による縦位の矢羽状沈線文を施すもの。③半截竹管による横位の沈線文と横位の矢羽状文が繰り返されるもの。である。さらに、やや張り出す胴下半部には全周する横位の沈線文が施され、以下が胴下半部文様帯となる。この部分は縄文を地文とし、半截竹管による弧状の沈線文が施される。半截竹管の幅は４～５mmである。内面は丁寧なミガキが施され、内面下半部にややススの付着がみられる。混和材として繊維は含まない。

時期は出土土器から縄文時代前期後半に比定され、土壙墓とみられる。

⑭ＳＫ23（第22・44図　写真図版21）

Ⅲ区で検出した。ＳＢ26に切られ、撹乱が及ぶため規模・深さは不明である。口縁部から頸部にかけて残存する土師器甕（第44図―４）が据えられていたことから古墳時代の土坑とした。

⑮ＳＫ24（第22図　写真図版21）

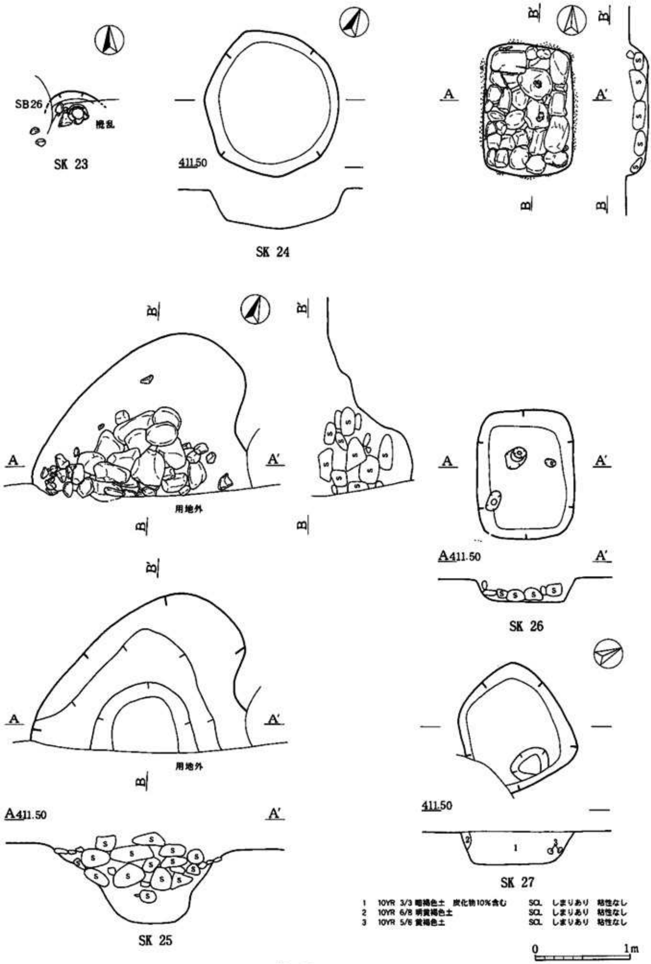
Ⅳ区で全体を検出した。ＳＫ27・ＳＫ28を切る。規模は1.5×1.4m、深さは42cmで円形を呈する。弥生土器・須恵器・陶器破片が出土し、時期は不明である。

⑯ＳＫ25（第22図　写真図版23）

Ⅳ区で検出した。南側が調査区外となり、規模は東西方向で２m程度、深さ最深部で85cm、不整形を呈する。土坑の中央が深くなり、人頭大から握り拳大の自然石が積まれている。土師器・須恵器・陶器小破片のみで時期は不明である。

⑰ＳＫ26（第22図　写真図版22）

Ⅳ区で全体を検出した。規模は1.35×0.95m、深さ25cmで隅丸長方形を呈する。径20～40cmの平石が底部全面に敷かれている。石の真下には焼土・炭化物・灰・骨片が残る。土坑内全体が焼けている。何の骨か特定はできないが、火葬墓もしくは何らかの焼成遺構とみられる。土師器破片がわずかに出土す


SB26
撹乱
SK 23
411.50
SK 24
A
A'
B
B'
用地外
A411.50
SK 25
SK 26
SK 27
1　10YR 3/3 暗褐色土　炭化物10%含む　SCL　しまりあり　粘性なし
2　10YR 6/8 明黄褐色土　SCL　しまりあり　粘性なし
3　10YR 5/6 黄褐色土　SCL　しまりあり　粘性なし
0
1m

第22図　SK23～27

るのみで時期は不明である。

⑱ＳＫ27（第22・43図　写真図版23）

Ⅳ区で全体を検出した。ＳＫ24に切られる。規模は1.2×1.1m、深さ35cmで隅丸方形を呈する。出土遺物はわずかで、第43図－７の縄文土器片は、半截竹管による横位の沈線文を地文とし、ボタン状貼付文が施されたものである。縄文時代の可能性があるが特定できない。

⑲ＳＫ28（第23・44図　写真図版23）

Ⅳ区で全体を検出した。ＳＫ24に切られる。規模は2.35×1.35m、深さ20～30cmで隅丸方形を呈する。第44図－５は土師器内黒杯破片で、丁寧なヘラミガキが施され、体部に稜をもつことから須恵器模倣杯の可能性がある。時期は古墳時代以降ともみられるが特定できない。

⑳ＳＫ29（第23・43・47図　写真図版24・38）

Ⅳ区で全体を検出した。規模は1.53×1.53m、深さは47cmで円形を呈する。第43図－８・９は縄文土器片で、いずれも半截竹管による沈線文が施されている。このほか第47図－18の黒曜石製石鏃が出土する。縄文時代の可能性があるが特定できない。

㉑ＳＫ30（第23図　写真図版24）

Ⅳ区で全体を検出した。規模は1.05×0.95m、深さは25cmで円形を呈する。遺物の出土はなく時期は不明である。

㉒ＳＫ31・32（第23・44図　写真図版24）

Ⅳ区で全体を検出した。断面観察からＳＫ31をＳＫ32が切るとみられる。ＳＫ31は規模1.2×1.05m、深さは25cmで不整形、ＳＫ32は規模1.05×0.95m、深さは36cmで円形を呈する。ＳＫ31から第44図－６の陶器おろし皿破片がわずかに出土するのみ、ＳＫ32からの出土はなく、中世以降の可能性があるが特定できない。

㉓ＳＫ33（第23図　写真図版24）

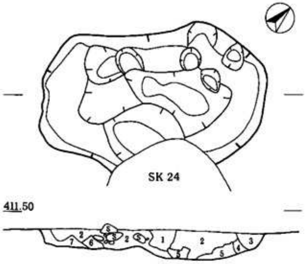
Ⅳ区で全体を検出した。規模は1.16×1.13m、深さは37cmで円形を呈する。土師器・須恵器・灰釉陶器破片が出土するのみで時期は不明である。

㉔ＳＫ34（第23図　写真図版24）

Ⅳ区で全体を検出した。規模は1.21×0.93m、深さは17～40cmで不整形を呈する。陶器破片をわずかに出土するのみで時期不明である。

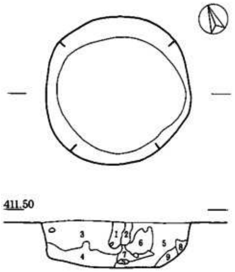
㉕ＳＫ35（第23図）

Ⅱ区で検出した。全体の1/4程度の確認のため、規模は不明、深さは17～54cmである。握り拳大の石



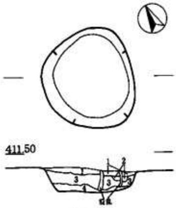
SK 28

1	10YR 4/3 にぶい黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし
2	10YR 3/3 暗褐色土	炭化物1%含む	SCL	しまりあり	粘性なし
3	10YR 3/1 黒褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし
4	10YR 4/2 灰黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし
5	10YR 6/6 明黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし
6	10YR 3/3 暗褐色土	黄褐色土5%含む	SCL	しまりあり	粘性なし
7	10YR 5/8 黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし



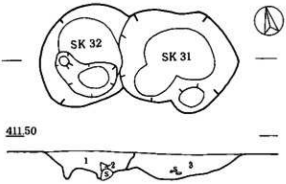
SK 29

1	10YR 2/1 黒色土	SCL	しまりあり	粘性なし
2	10YR 5/6 黄褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし
3	10YR 4/4 褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし
4	10YR 4/3 にぶい黄褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし
5	10YR 3/4 暗褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし
6	10YR 5/4 にぶい黄褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし
7	10YR 3/2 黒褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし
8	10YR 5/8 黄褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし
9	10YR 2/3 黒褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし



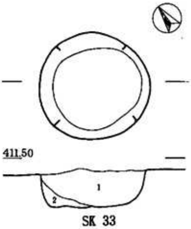
SK 30

1	10YR 4/3 にぶい黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし
2	10YR 4/4 褐色土	明黄褐色土ブロック含む	SCL	しまりあり	粘性なし
3	10YR 3/3 暗褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし
4	10YR 4/6 褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし



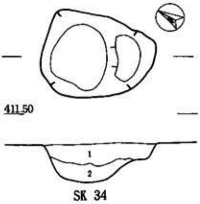
SK 32　　SK 31

1	10YR 3/2 黒褐色土	明黄褐色土10%含む	SCL	しまりあり	粘性なし	(SK32覆土)
2	10YR 6/8 明黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	(SK32覆土)
3	10YR 3/2 黒褐色土	炭化物含む	SCL	しまりあり	粘性なし	(SK31覆土)



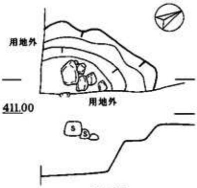
SK 33

1	10YR 3/2 黒褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし
2	10YR 2/2 黒褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし



SK 34

1	10YR 3/2 黒褐色土	炭化物含む	SCL	しまりあり	粘性なし
2	10YR 3/1 黒褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし



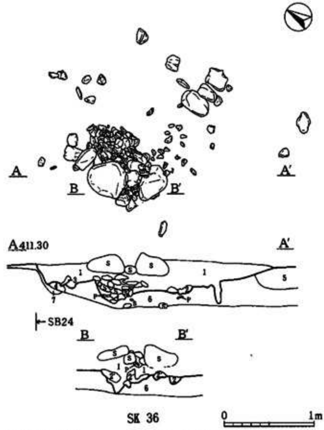
SK 35

第23図　SK28～35

が入っていたほか、縄文土器・土師器破片のみで時期は不明である。

㉘ＳＫ36（第24・44図　写真図版25）

Ⅲ区で検出した。ＳＢ24の掘り下げ時に確認したもので、土坑の範囲は平面的には把握できず、石及び断面観察から第24図Ａ—Ａ′１～３層を土坑覆土とした。規模は断面観察から南北方向で2.65m、深さは25～45cmになる。ＳＢ24を切るとみられる。石はおおむね1.2×1.0mの範囲にまとまっており、下半部は握り拳大の石が詰められ、その上に人頭大の平石が配されている。石は焼けており炭化物・焼土が認められ、石の周囲から骨片が出土する。何の骨かは特定できないが、火葬墓の可能性もある。石の間から遺物が出土しているがいずれも破片であり、ＳＢ24からの混入も考えられる。



1	10YR 3/2 黒褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
2	10YR 3/1 黒褐色土	炭化物やや含む	SCL	しまりあり	粘性なし	
2′	10YR 3/1 黒褐色土	炭化物・焼土多し	SCL	しまりあり	粘性なし	
3	10YR 7/6 明黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
4	10YR 6/4 にぶい黄橙色土		SCL	しまりあり	粘性なし	(SB24覆土)
5	10YR 3/4 暗褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	(SB24覆土)
6	10YR 4/3 にぶい黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	(SB24覆土)
7	10YR 3/3 暗褐色土		SCL	しまりあり	粘性ややあり	(SB24覆土)

第24図　SK36

本址に伴う可能性のあるものに、須恵器（第44図—７・11～13）、土師器（同図—10）、灰釉陶器（同図—８・９）がある。７の須恵器杯は回転糸切り底で軟質である。８・９の灰釉陶器皿はいずれもハケ塗り施釉で、８は三日月高台をもち、硯に転用されていた可能性がある。10の土師器甕はロクロ成形によるものである。11の須恵器甕は底部の一部であるが大型の広口甕とみられる。このほか、12・13の須恵器大甕片が出土している。時期は平安時代ないしそれ以降とみられるが特定できない。

3. 溝址（ＳＤ）

①ＳＤ01・ＳＤ02（第25・44・47図　写真図版26・38）

Ｉ区で検出した。ＳＤ01とＳＤ02との前後関係は覆土からでは把握できず両者の時期差はほとんどないとみられる。

ＳＤ01はくの字に曲がり、確認できた長さは５m程度、幅0.9～1.2cm、深さ50cmである。縄文土器破片（第44図— 14・15）が出土する。14は口唇部に押し引きによる刻みがあり、半截竹管による刺突が施される。15は半截竹管による沈線文があり、胎土に石が多い。

ＳＤ02は確認できた長さは3.2m程度、幅60～90cm、深さ30cmである。縄文土器破片（第44図—16～18）が出土する。16は半截竹管による横位の沈線文、17は爪形の刺突と沈線文、18は半截竹管による刺突文が施されている。また、第47図—19の硬砂岩製打製石斧が出土する。

ＳD01・ＳD02ともに縄文時代前期後半とみられる。

②ＳD03（第25・44・47図　写真図版26・38）

Ⅲ区で検出した。ＳB25に切られる。北側のⅡ区の方に向かって屈曲することから、当初方形周溝墓の可能性も想定したが、Ⅱ区でその延長部分が確認できなかったことや出土遺物から溝址とした。確認した部分での長さは12m程度、幅40～70cm、深さ30～40cm である。出土遺物には、第44図—19・20の縄文土器破片である。19は半截竹管によるレンズ状文、20は半截竹管による押し引き文と沈線文が施されている。また、第47図—20の硬砂岩製打製石斧が出土している。縄文時代前期後半とみられる。

③ＳD04（第25・47図　写真図版26）

Ⅰ区で検出した。ＳM01を切る。確認できた長さは７m程度、幅0.5～1.2m、深さは20cm程度である。出土遺物には、縄文土器小破片のほか、第47図—21の緑色岩製打製石斧、同図—22の緑色岩製磨製石斧未製品がある。時期は、切り合い関係から弥生時代以降とみられるが特定できない。

④ＳD05（第25図　写真図版27）

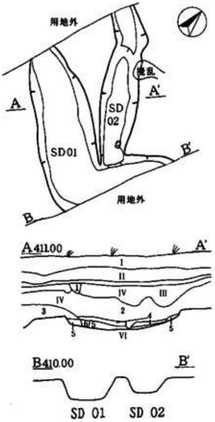
Ⅰ区で検出した。西側の石がある一画からは炭化物が出土している。北側に向かって屈曲するが、その延長部を確認することはできない。本址の出土遺物は土器小片のみで時期を特定できないが、覆土の状況からＳD01・02と近接した時期であることが想定される。しかし、相互の関連性があるかは判断できない。確認できた長さは4.8m程度、幅50～78cm、深さ30～50cm である。

⑤ＳD06（第26図　写真図版28）

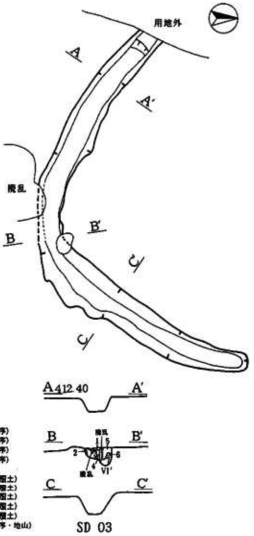
Ⅳ区で検出した。発掘作業の工程上、北側と南側とを別々に調査したため両者の遺構検出面の高さが異なる。また、当初同一の溝として認識しておらず図上復元によって一連の溝として把握した。東側半分は調査区外になるため本来円を描くかは不明であり、耕作による削平のためか途切れている。北側の巨石は地山の石である。確認できた長さは36m程度、幅２～4.6m、深さ10～20cm 程度で、円を描くとすると径23m程度になる。規模からすると古墳の周溝にもみえるが、遺物及び葺石などはなく古墳とする根拠に欠けるため、溝址とした。

⑥ＳD07（第26・44図　写真図版27）

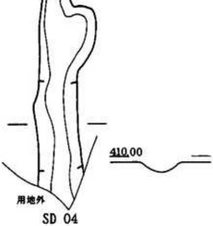
Ⅲ区で検出した。ＳB28を切る。確認できた長さは3.8m、幅30～50cm、深さ35cm程度である。出土遺物はＳB28からの混入も考えられる。須恵器（第44図—21）、灰釉陶器（同図—22～24）がある。21の須恵器杯は軟質で回転糸切り底のみである。22・23の灰釉陶器皿は破片のため釉薬はわずかに確認できるのみであるが、22は三日月高台をもつ。24の灰釉陶器壷は底部のみである。時期は平安時代以降とみられるが特定できない。

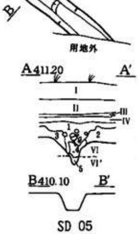


I	造成盛土					(基本層序)
II	耕土(田)					(基本層序)
III	耕土(床土)					(基本層序)
IV	10YR 3/2 黒褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	(基本層序)
1	10YR 4/2 灰黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
2	10YR 2/1 黒色土		SCL	しまりあり	粘性なし	(SD01覆土)
3	10YR 2/3 黒褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	(SD01覆土)
4	10YR 2/1 黒色土	10YR 6/8 明黄褐色土2%含む	SCL	しまりあり	粘性なし	(SD01覆土)
5	10YR 2/1 黒色土	10YR 6/8 明黄褐色土10%含む	SCL	しまりあり	粘性ややあり	(SD01覆土)
6	10YR 2/1 黒色土	10YR 6/8 明黄褐色土混	SCL	しまりあり	粘性ややあり	(SD01覆土)
VI	10YR 6/8 明黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	(基本層序・地山)

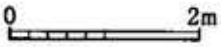


1	10YR 2/1 黒色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
2	10YR 4/4 褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
3	10YR 4/3 にぶい黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
4	10YR 3/3 暗褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
5	10YR 2/2 黒褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
6	10YR 5/8 黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
7	10YR 2/2 黒褐色土	10YR 6/6 明黄褐色土10%含む	SCL	しまりあり	粘性なし	
VI′	10YR 7/6 明黄褐色土		S	しまりあり	粘性なし	(基本層序・地山)

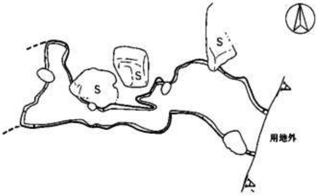


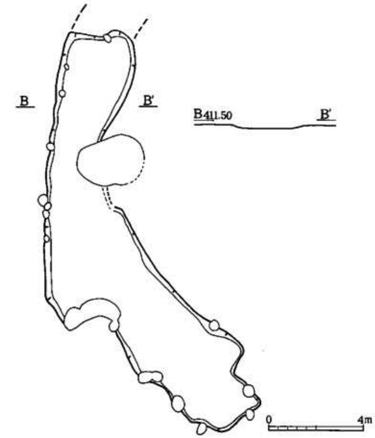


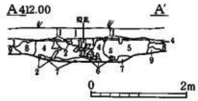
I	造成盛土					(基本層序)
II	耕土(田)					(基本層序)
III	耕土(床土)					(基本層序)
IV	10YR 3/2 黒褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	(基本層序)
1	10YR 3/1 黒褐色土	握り拳大の礫含む	SCL	しまりあり	粘性なし	(SD05覆土)
2	10YR 2/2 黒褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
3	10YR 4/4 褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	(SD05覆土)
4	10YR 3/1 黒褐色土	10YR 7/8 黄橙色土5%含む	SCL	しまりあり	粘性ややあり	(SD05覆土)
5	10YR 4/1 褐灰色土	10YR 7/6 明黄褐色土7%含む	SCL	しまりあり	粘性あり	(SD05覆土)
VI	10YR 6/8 明黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	(基本層序・地山)
VI′	10YR 7/6 明黄褐色土		S	しまりあり	粘性なし	(基本層序・地山)



第25図　SD01～05

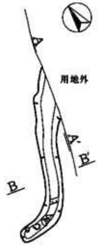


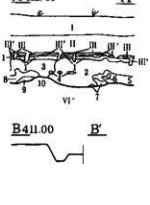




Ⅰ	造成盛土				(基本層序)
Ⅱ	耕土(田)				(基本層序)
1	7.5YR 4/2 灰褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし	
2	7.5YR 3/2 黒褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし	
3	7.5YR 3/1 黒褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし	
4	7.5YR 3/3 暗褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし	
5	7.5YR 2/2 黒褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし	
6	7.5YR 4/3 褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし	
7	10YR 6/6 明褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし	
8	10YR 3/2 黒褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし	
9	10YR 4/4 褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし	

SD 06





Ⅰ	造成盛土					(基本層序)
Ⅱ	耕土(田)					(基本層序)
Ⅲ	耕土(床土)					(基本層序)
Ⅲ'	耕土(床土)					(基本層序)
1	10YR 3/3 暗褐色土	鉄分の沈殿あり	SCL	しまりあり	粘性なし	
2	10YR 3/3 暗褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
3	10YR 3/2 黒褐色土		SCL	しまりあり	粘性ややあり	
4	10YR 3/3 暗褐色土	焼土・炭化物含む	SCL	しまりあり	粘性なし	
5	10YR 4/3 にぶい黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性ややあり	
6	10YR 4/2 灰黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性ややあり	
7	地山(SD07の壁)					
8	10YR 4/6 褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	
9	10YR 4/6 褐色土	焼土・炭化物含む	SCL	しまりあり	粘性なし	
10	SB28焼土					
Ⅵ'	10YR 7/6 明黄褐色土		S	しまりあり	粘性なし	(基本層序・地山)

SD 07

第26図　SD06・07

4. 方形周溝墓（ＳＭ）

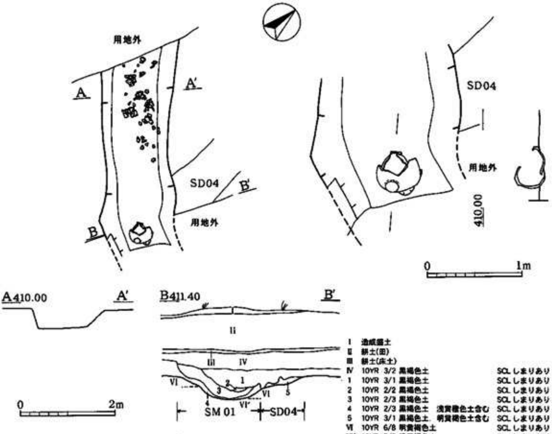
①ＳM01（第27・45・47図　写真図版26・29・39）

Ｉ区で検出した。ＳD04に切られる。検出したのは溝の一部であるが、検出した溝の東側底部に甕と壷を組み合わせた弥生土器が横倒しの状態で据えられていたことからこれを土器棺と判断し、また溝の形態等から方形周溝墓とした。周溝の範囲としては本址の南側にあるＳD01が規模・位置的にも対応するようにみえるが、覆土や遺物の出土状況からみて別の遺構と考えられること、また土器棺が出土した箇所から北側に屈曲する可能性があることから、方形周溝墓の本体は今回確認した溝より北側にあると想定される。主体部は削平されているか、調査区外になるとみられる。確認した溝の長さは4.2m、幅1.3〜1.5m、深さ40cm程度である。溝の一部のみの把握のため全体規模は不明である。

西側の覆土から小礫とともに出土した土器と土器棺はいずれも弥生土器（第45図―１〜６）である。１は壷、２は小型壷、３は高坏脚、４は甕の台部である。

土器棺は、６の甕の口縁部側に、５の壷の下半部をかぶせた合口のもので、上に向けられた部分は壷・甕ともに大きく欠損していた。壷は上半部を欠き、甕は胴部の1/3程度が残る。これまでの土器棺の出土事例では胴部に円形の焼成後穿孔をするもの、胴部の一部を大きく打ち欠くものなどがある。このことから本址も同様に意図的に土器の一部を欠いたものと考えられる。棺内部には土が入り込み、土器内からの遺物の出土はなかった。

石器としては第47図―23・24が覆土から出土している。23は硬砂岩製打製石斧、24は硬砂岩製有肩扇状形石器である。



I	造成盛土					(基本層序)
II	耕土(田)					(基本層序)
III	耕土(床土)					(基本層序)
IV	10YR 3/2 黒褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	(基本層序)
1	10YR 3/1 黒褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	(SM01・04覆土)
2	10YR 2/2 黒褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	(SM01覆土)
3	10YR 2/3 黒褐色土		SCL	しまりあり	粘性ややあり	(SM01覆土)
4	10YR 2/3 黒褐色土	浅黄橙色土含む	SCL	しまりあり	粘性あり	(SM01覆土)
5	10YR 3/1 黒褐色土	明黄褐色土含む	SCL	しまりあり	粘性あり	(ＳD04覆土)
VI	10YR 6/8 明黄褐色土		SCL	しまりあり	粘性なし	(基本層序・地山)
VI'	10YR 7/6 明黄褐色土		S	しまりあり	粘性なし	(基本層序・地山)

第27図　SM01

5. その他の遺構・遺物

①周辺ピット（第5・28～34図）

各区で小柱穴が確認されたが、掘立柱建物址として把握できるものはなかった。Ⅵ区は円形ないし方形の小柱穴が多数あり、中世以降の建物の存在も想定されたが確認できなかった。

②遺構外出土遺物（第46・48・49図　写真図版40～43）

土器・陶器(第46図)には、縄文時代早期・前期・中期・晩期、古墳時代前期、平安時代、中世がある。

1は口縁部に粘土紐の隆帯を巡らし、その下に波状に粘土紐を貼り付けている。縄文時代早期の木島式土器とみられる。2は縄文を地文とし浮線文を貼り付けヘラ状工具で刻みを入れており、縄文時代前期後半の諸磯b式土器とみられる。3は縄文を地文とし半截竹管による沈線文が施され、縄文時代中期初頭とみられる。4～9はいずれも半截竹管によるコンパス文を施したもので、胎土に金雲母を含むが繊維は含まない。縄文時代前期前半とみられるものである。10～33は縄文時代前期後半の土器である。10～14は棒状貼付文を付けたもので、貼付文には半截竹管の刺突がある。10・13は口唇部に刻みを入れ、地文は半截竹管による沈線である。11・12・14も地文は同様である。15は地文が半截竹管による沈線でボタン状貼付文が付けられている。16はボタン状貼付文によるもの。17～21は細い棒状貼付文を付けたもので、貼付文には半截竹管の刺突がある。いずれも地文は半截竹管による沈線である。18・20にはさらにボタン状貼付文が加わる。22～24は結節浮線文である。25～29は地文が半截竹管による沈線で、その上に半截竹管による押し引き文が施される。30～33は半截竹管による沈線が施されたものである。34～36は縄文を地文とし、その上に浮線文が施されたもので、縄文時代前期末の十三菩提式土器とみられる。37～44は縄文時代晩期の浮線文土器である。38はナデ調整、それ以外はミガキが施されている。43は赤彩がわずかに残る。44は条痕文土器の破片である。

45～49は古墳時代前期の土器。45～48はS字状口縁甕の口縁部破片。49は同様の甕台部破片である。

50・51は平安時代の黒色土器杯と皿で底部は回転糸切り底である。

52・53は天目茶碗、54は水注でいずれも破片である。

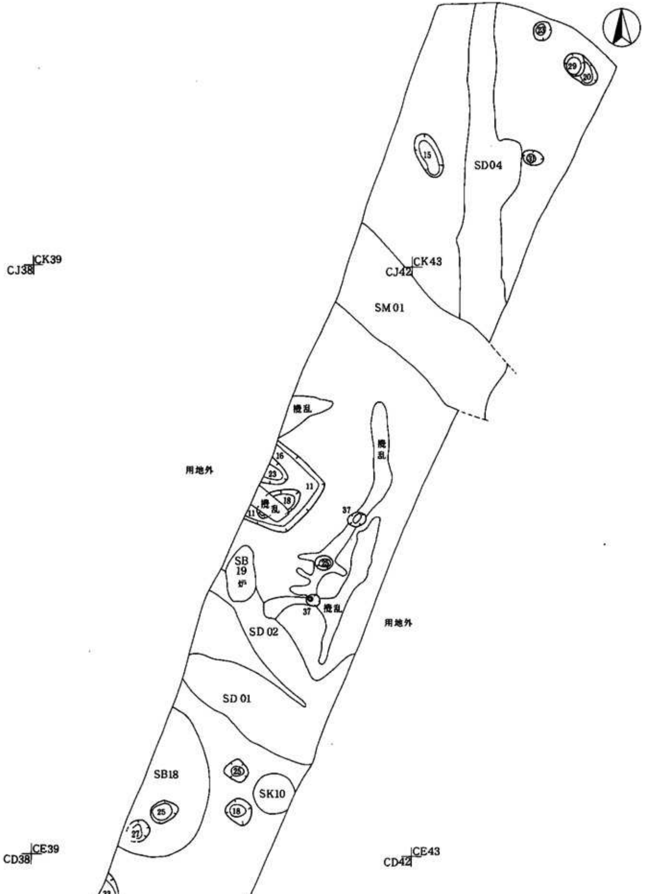
製品としての石器（第48図）の量は特に多いとはいえない。

1～12は打製石斧で、4が緑色岩製、9・10が粘板岩製、その他は硬砂岩製である。13～17は黒曜石製石鏃、18・19は黒曜石製・下呂石製の石錐である。

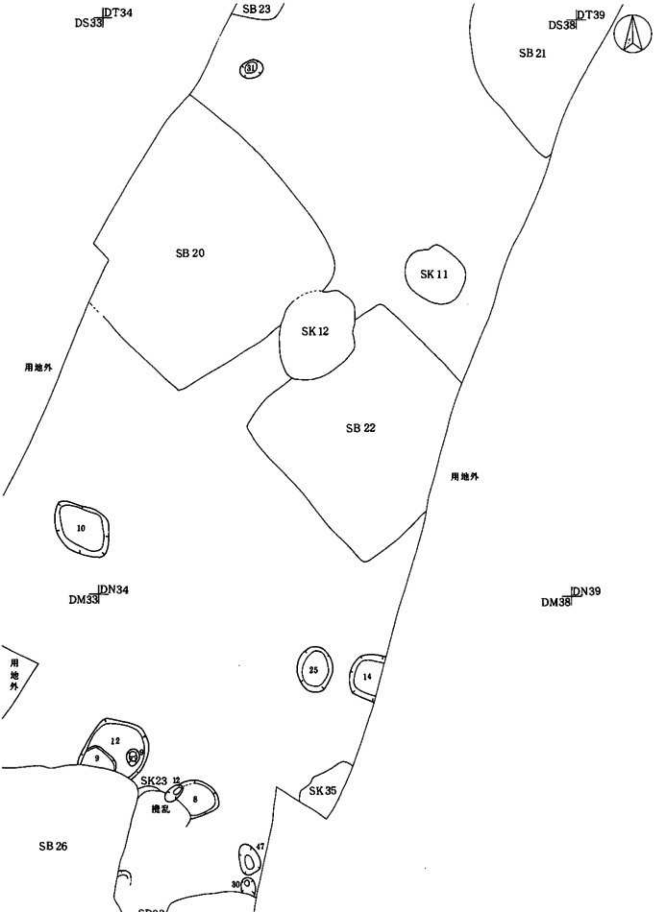
また、掲載していないが黒曜石破片が多く出土している。

土製品・玉類（第49図）もⅢ区からわずかであるが出土した。

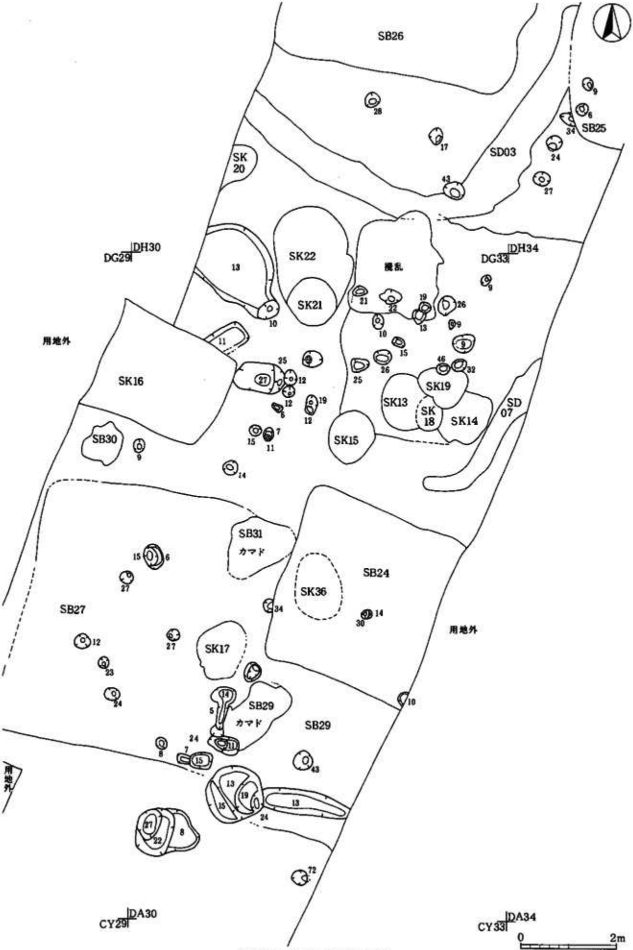
1は土錘、2は土製丸、3は臼玉である。2は貫通孔がなく球形の土製品である。



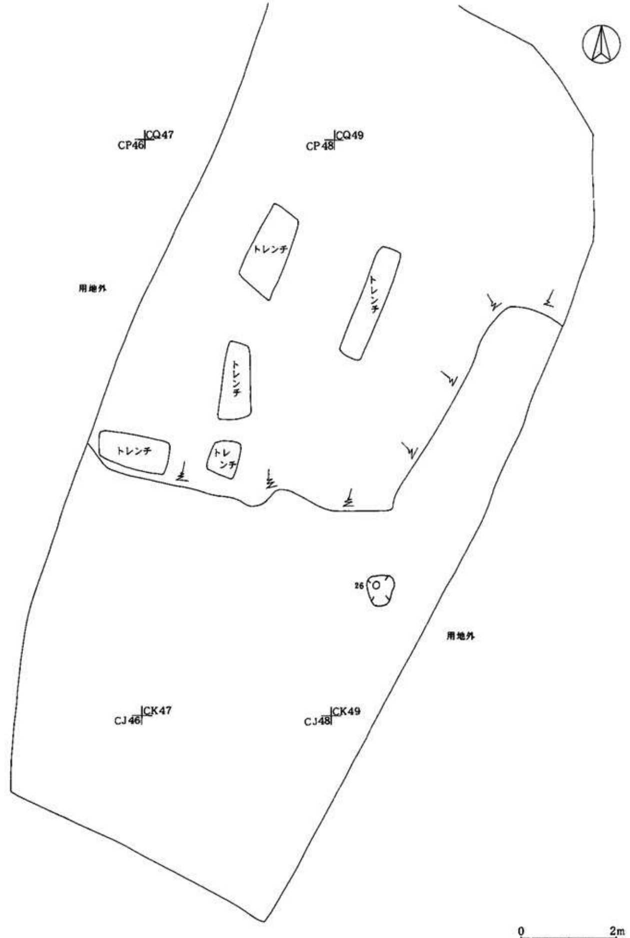
第28図　I区周辺ピット図



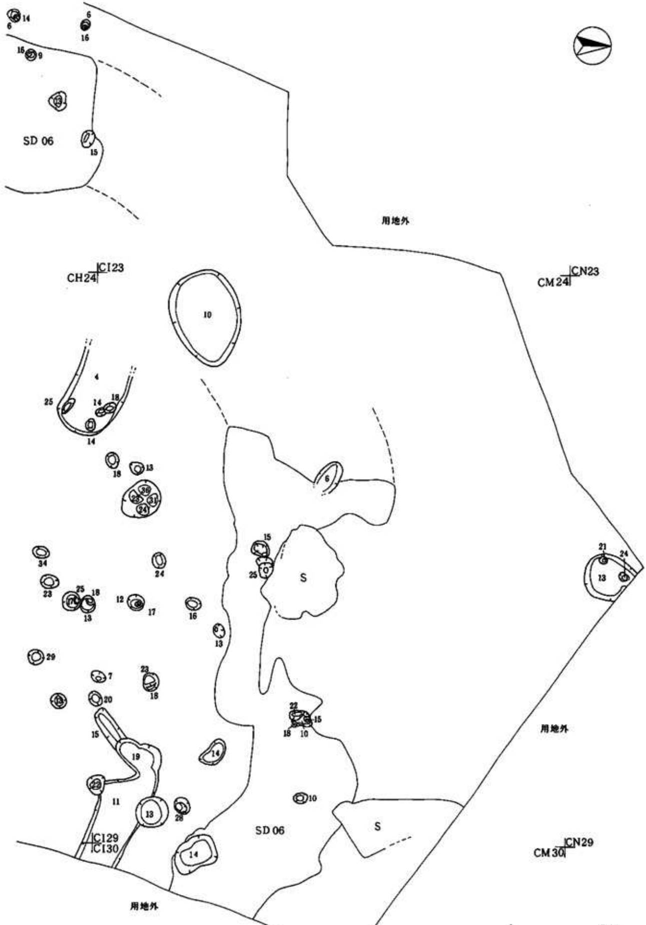
第29図　Ⅱ区周辺ピット図



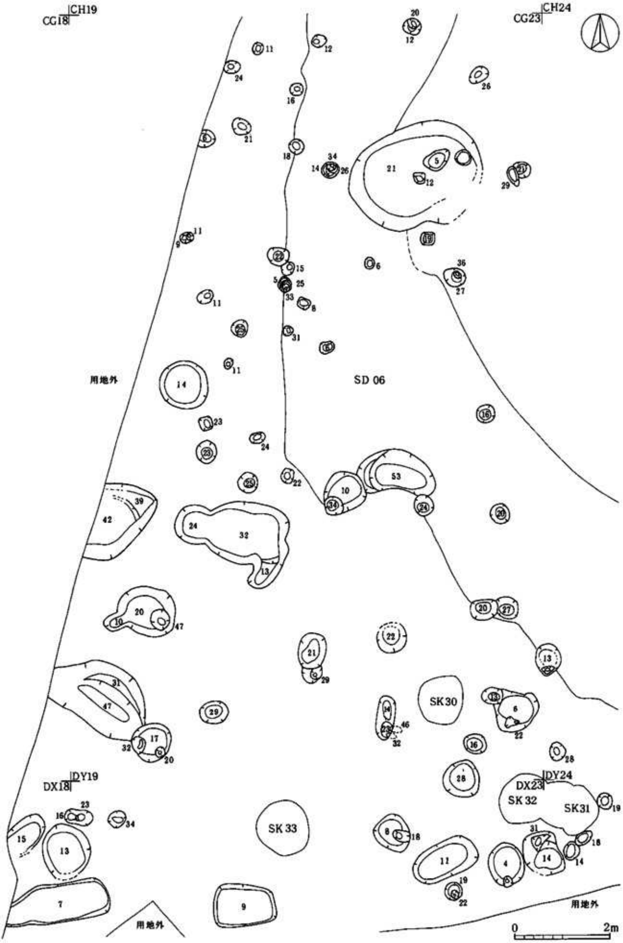
第30図　Ⅲ区周辺ピット図



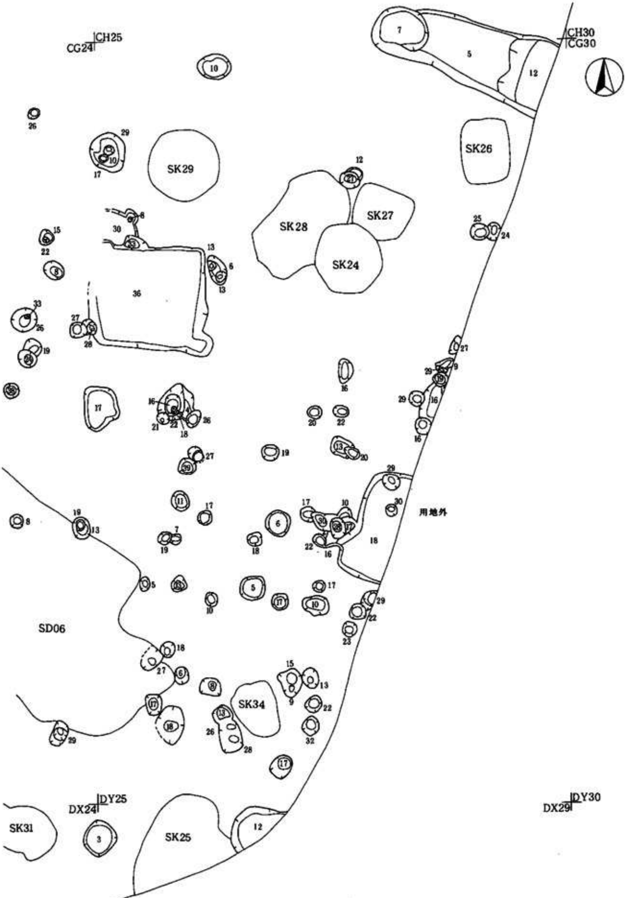
第31図　Ⅳ区周辺ピット図



第32図　VI区周辺ピット図（1）



第33図　VI区周辺ピット図（2）



第34図　VI区周辺ピット図

第Ⅳ章　　まとめ

矢崎遺跡は、天竜川とその支流である飯田松川の合流点に近く、舌状台地状に東西に細長く延びる低位段丘上の先端部に位置する。東側は天竜川、南側は飯田松川に面しており、段丘直下は湿地帯となり湧水地点があることから生活用水の確保が容易であり、また水田農耕を基盤とする弥生時代以降においては生産域となりうる氾濫原にも近く、舌状台地という地形的制約があるものの生活域としては良好な条件にあるといえる。

これを裏付けるように、過去に実施された２度の発掘調査では、縄文時代前期・中期・晩期、奈良・平安時代の遺構・遺物が確認されている。特に調査例の少ない縄文時代前期の集落址や平安時代の集落・工房址の存在が特筆される。これらの遺構・遺物は、段丘上の平坦地のみならず、段丘の傾斜面から氾濫原に接する一段低い段丘面でも確認されており、段丘一帯の土地利用には時代やその性格による違いがみられる。

今回の発掘調査は面積としては限られていたが、段丘の先端部を南北に縦断するものであったことから、結果として段丘の平坦部と縁辺部における土地利用状況をおおまかではあるが把握することができた。

今回確認したのは、縄文時代前期の集落、弥生時代後期の集落と墓域、古墳時代中期から後期の集落、平安時代前期の集落である。このほか、出土遺物では縄文時代前期・中期・晩期、古墳時代前期のものがあり、生活域として断続的ではあるが長期にわたって利用されていたことを再確認する結果となった。

ただし、今回の調査で特にⅢ区とした調査区では縄文・古墳・平安各時代の遺構が重層的に確認された状況をみる限り、遺構の切り合いや後世の造成・耕作による削平が確認されるものの、遺構の検出状況や調査区内の断面観察による所見からみて、結果としては調査時において遺構確認面の把握が不十分であったと認識している。とはいえ、今回の調査結果から各時期の特徴・傾向をある程度推測することは可能であると考えることから、時代ごとに特徴となる事項を取り上げ、課題として提示することでまとめとしたい。

矢崎遺跡では、本報告書となる平成19年度調査以前に２度発掘調査が実施されている。以下、過去の調査を第１次調査、第２次調査として記述する。なお、調査は合併前の上郷町によるものである。

第１次調査—昭和60年度実施・町道改良工事に先立つ発掘調査

上郷町埋蔵文化財発掘調査報告書第20集『中島遺跡　矢崎遺跡』(1989)

第２次調査—昭和62年度実施・地域農業拠点整備事業に先立つ発掘調査

上郷町埋蔵文化財発掘調査報告書第12集『矢崎遺跡』(1988)

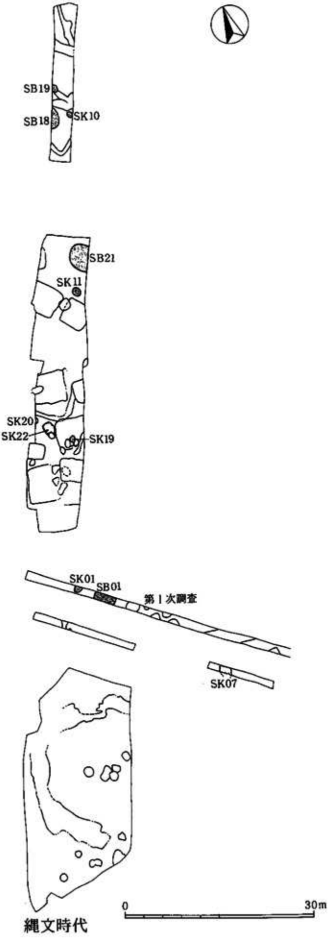
1. 縄文時代前期後半（第35図）

遺構分布は、今回の調査では竪穴住居址３軒と土坑５基、第１次調査ではⅢ区の南東側で竪穴住居址１軒と土坑２基が確認されている。これらはおおむね南北70～80mの範囲に広がっている。

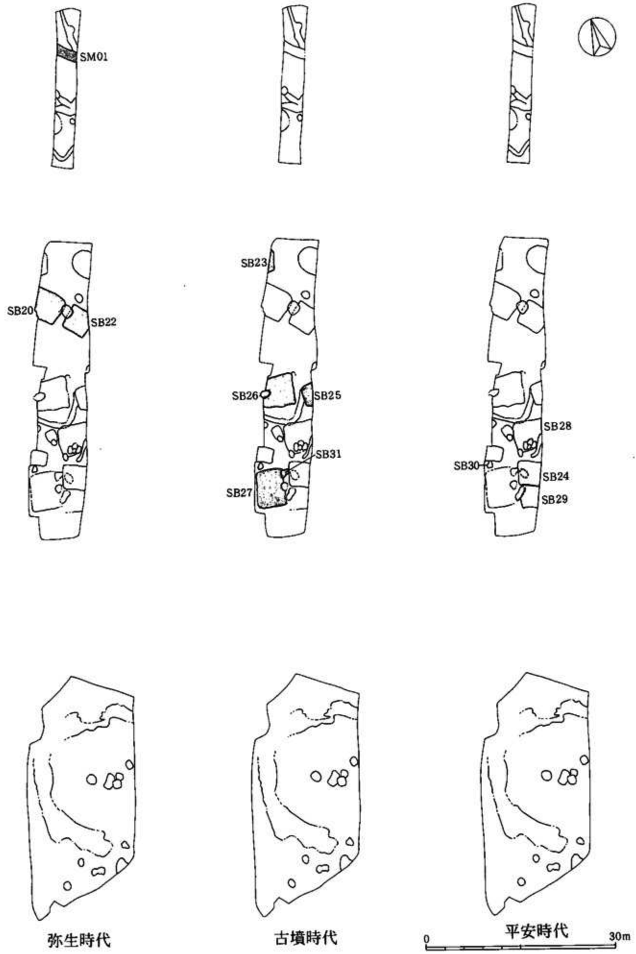
遺構の特徴としては、今回の調査で確認された概期の住居址は、上部の削平により検出状態は良好ではなく、いずれも掘り込みは浅く不整円形を呈している。これに対し、土坑からの出土遺物はまとまっ

ており、前期後半の様相を明確に示している。概期の土坑としたものにはＳＫ11・19・20・22がある。ＳＫ10は詳細時期の特定がし難いが、同時期の可能性も考えられる。このほか、ＳＫ27・29も遺物の出土は少ないが概期の可能性がある。ＳＫ11の遺物は破片であるが、ＳＫ10・19・20・22は土器の出土などから土壙墓と考えた。土壙墓の形態としてはＳＫ10・19・20が径１ｍ前後の円形に近い形態であるのに対し、ＳＫ22は2.5×1.6ｍの長方形を呈する点で違いがある。第１次調査の土壙１も検出は一部であるが長方形を呈する可能性がある。当地域における概期の土壙墓例が少ないため比較できないが、時期はやや下る中期中葉の城陸遺跡（竜丘）では、土壙墓と考えられるものに径１ｍ前後かそれ以下の円形を呈するものが主体となっている。土壙墓からの出土遺物は、ＳＫ10は小型粗製土器の一部・打製石斧、ＳＫ11は打製石斧・石鏃・石錐、ＳＫ19は大型深鉢・２種の小型土器の一部、ＳＫ20は有孔浅鉢の一部、ＳＫ22は大型深鉢の一部である。ＳＫ22は意図的な破砕と埋納が想定できる。今回の調査では、土壙墓の規模・形態と出土遺物・状況に相関関係を見出すことはできない。

集落構成としては、概期の集落範囲は今回の調査と第１次調査から想定できる。第１次調査では竪穴住居址１軒・土坑２基が確認され、今回の調査では竪穴住居址３軒（ＳＢ18・19・21）と土壙墓と考えられる土坑５基（ＳＫ（10・）11・19・20・22）が確認されている。いずれも時期は前期後半となるが、土壙墓以外の住居址等からの出土遺物が少なく比較がし難いが、当然すべての遺構が同時期並存ではないとしても、傾向としては南北70～80ｍの範囲に集落のまとまりがあり、台地の平坦部（今回調査のⅡ・Ⅲ区）が集落の中心として土壙墓群が存在し、その周囲を取り巻くように竪穴住居址があるとみられる。特に土壙墓の可能性が高いＳＫ19・20・22が中間あたりに集中し



第35図　時代別遺構分布図（1）



第36図　時代別遺構分布図（2）

ていることから、集落の中心部に墓域が存在するとの推測ができる。土坑がある中心部は古墳・平安の集落との重複が著しく、土壙墓も本来は相当数があったと推定される。こうした集落形態をいわゆる環状集落といえるかどうかは周辺部の調査に待たなければならない。市内の前期集落の調査例は多くはないが、前期終末から中期初頭の美女遺跡や黒田大明神原遺跡では、住居址と土坑群の分布状況から集落の中で場の機能が分化していたこと、また前期初頭の田井座遺跡でも集落が環状構造をとる可能性が指摘されており、今回の状況もそれを前期における環状集落構造の可能性を想定させるものといえる。こうしたことから、矢崎遺跡は今後前期後半の典型的な集落の一つとなるであろう。

周辺遺跡との関係としては、近接する別府中島遺跡や高松原遺跡で概期の集落が確認されている。別府中島遺跡は矢崎遺跡と同様の条件にある低位段丘上にあるが、これに対し高松原遺跡は低位段丘でも一段高く高燥台地とされるところであり、これらの集落関係を把握することで、集落変遷や土地利用の観点から重要な資料を提供することとなろう。

2. 弥生時代後期後半（第36図）

遺構分布は、Ⅰ区で方形周溝墓1基（ＳＭ01)、Ⅱ区で竪穴住居址2軒（ＳＢ20・22）を確認したが、過去の調査では概期の遺構は検出されていない。

遺構の特徴としては、竪穴住居址は一辺4～5ｍの隅丸方形を呈し、4本の主柱穴、炉は炉縁石を伴わないが土器を埋設するもので、概期の典型的な住居形態をとる。ＳＢ22で間仕切りとみられる小柱穴と入口施設がある。いずれも炉内の土器以外に出土遺物が極めて少ない。

方形周溝墓は部分的な確認のため規模は不明であるが、壷と甕の合わせ口の土器棺をもつ点が注目される。土器棺は甕1個体と壷下半部を用いた合わせ口のもので、甕の口縁部側に蓋をするように壷の下半部をかぶせて横倒しの状態で据えられていた。さらに、甕・壷共に胴部が大きく欠損しており、棺の上部は大きくあいていた。また、周溝内には土器棺とは別に、覆土から土器片がまとまって出土している。溝の底部から浮いた状態であり、溝が埋没する段階でのものとみられるが、意図的なものかは把握できなかった。土器棺を伴う例はこれまでに確認された方形周溝墓総体からみて割合としては低いが、橋爪遺跡（上郷）の方形周溝墓1で壷による土器棺2基、甕による土器棺1基、方形周溝墓6で壷による土器棺1基、垣外遺跡（上郷）では方形周溝墓8で壷による土器棺1基、ＳＭ13で壷による土器棺1基が確認されている。これらはいずれも1個体単体を棺としたものである。これに対し、座光寺中島遺跡（座光寺）のＳＭ01は壷と甕の合わせ口の土器棺で、矢崎遺跡例と類似する。これら土器棺の傾向としては、据えられる位置は周溝の四隅又は周溝一辺の中央付近が多く、土器棺の長軸と溝の方向が並行する。土器棺となる土器は、形としては住居址で通常出土する壷や甕であり、土器棺に限っていえば特殊な器種のものは確認されていない。しかし、棺にする際に意図的に胴部を打ち欠くことがなされている。墓域を同じくする方形周溝墓でも土器棺を伴うものと伴わないものがあり、墓の規模との相関関係は確認できない。類例が少ないため、方形周溝墓の位置付けを述べるまでには至らないが、土器棺を伴う方形周溝墓については、墓域内での差か、あるいは造墓集団の性格によるものかなどが今後の検討課題である。また、周溝内出土土器を方形周溝墓に関わる祭祀行為として捉えるか否かなども詳細な出土状況の把握とともに事例の検討が必要である。

集落構成としては、２軒とも出土遺物が極めて少なく、炉内の土器からは時期差は認めがたいが、両住居址が近接することから２時期の変遷は想定される。検出した竪穴住居址はⅡ区に限られるが、Ⅲ区の遺構分布からみて弥生時代と同様に地山を掘り込んでいる古墳時代以降の集落によって本来Ⅲ区のほうにまで広がっていた住居址が後世の遺構により壊されている可能性がある。いずれにせよ、Ⅱ区で住居址の重複がみられないことから、当該地における遺構分布は密ではないとみられる。方形周溝墓と集落については、「弥生時代の周溝墓は単位集団により築造された墓」で、「ある程度の規模をもつ集落には必ず方形周溝墓をもつ」との指摘がなされており、両者の位置関係については、「集落を構成する単位集団が居住空間と比較的近接した場所（50m前後）を墓域と定めて周溝墓を築造」する例と「集落域とは少しはなれた箇所（100～200m程度）に墓域を区別している」例とがあるとされる（山下2001・2002)。段丘北側縁辺部のⅠ区にある方形周溝墓とⅡ区の竪穴住居址とは40m程度離れているが、集落と墓域が同一台地上に連動して形成された可能性が考えられる。現時点では北側縁辺を墓域、段丘平坦部を居住域とし、南北方向に狭く、東西方向に広がる集落展開が想定される。しかし、低位段丘としては安定した土地であるとみられるものの遺構の密度から長期継続する集落の存在は想定できず、同一段丘上での集落の移動があったか、今回調査地点よりも西側の広い平坦部に集落の中心があるとも考えられる。いずれにせよ、今後の周辺部の調査に待ちたい。

周辺遺跡との関係としては、矢崎遺跡の一段下にある氾濫原に面した兼田遺跡から後期前半及び後期末の集落が確認されている。いずれも集落の一画を調査したのみで集落規模や存続期間を十分に把握できないが、弥生時代後期の遺跡立地と集落変遷を考える上で注意したい。

3. 古墳時代中期後半～後期前半（第36図）

遺構分布は、Ⅱ区に竪穴住居址１軒（ＳＢ23）があるほかは、Ⅲ区に４軒（ＳＢ25・26・27・31）が集中する。第１次・２次調査では概期の遺構は検出されていない。

遺構・遺物の特徴としては、規模はＳＢ26・27が一辺５～６ｍ程度であるのに対し、ＳＢ25は一辺3.5ｍで概期の住居址としては比較的小さい。４本の主柱穴をもち、炉址を有するＳＢ27とカマドを有するＳＢ25・26・31がある。炉址は地床炉、カマドは基本的に石芯粘土カマドである。ＳＢ27に入口施設がある。ＳＢ27は他の遺構との切り合いがあり、ＳＢ25が全体の1/3程度、ＳＢ31がカマドのみの検出で確認状況は良いとはいえないが、遺物はカマドを中心に出土している。出土遺物としては、いずれも土師器が中心であり、須恵器は小破片のみで確実に遺構に伴うものを確認できなかった。しかし、須恵器を模倣した土師器として、ＳＢ26から有蓋高杯の蓋、ＳＢ27から𤭯の口縁部が出土している。中期後半（５世紀後半）には、古墳築造の盛行ととともに須恵器も入ってくるが、この時期集落内での須恵器保有率は必ずしも多くはない。後述するが、矢崎遺跡の西側600m程の所に５世紀後半～６世紀前半の前方後円墳があり、この築造に関わった集団の集落の一つとして矢崎遺跡が考えられるが、須恵器の保有率は必ずしも多いとはいえない。今回は調査範囲が限られており、須恵器の保有について断定的なことはいえないが、模倣される須恵器の種類としては類例の少ない有蓋高杯や𤭯であることを考えると、集落様相と須恵器又はその模造品（いわゆる須恵器模倣杯を除く）の保有率との間に何らかの関係を見いだせるのかどうかは今後注意すべきである。

なお、特筆すべき遺物として古墳時代の墨書資料がある。ＳＢ27の土師器杯に描かれた「～」の墨書（第42図―１）で、概期のものとしては極めて珍しいものである。

集落構成としては、ＳＢ23は出土遺物がわずかで詳細時期が不明であるが、ＳＢ27が炉を有し、ＳＢ25・26・31がカマドを有する。各住居址の変遷は、Ｂ27→ＳＢ25→ＳＢ26・31が想定され、５世紀後半から６世紀前半へと断絶することなく連続した集落展開がみられる。住居址規模に違いがあるが集落構成としての把握には至らない。住居内施設として炉からカマドへの過渡期にあたるが、居住域を同じくする同一集団内で炉からカマドへの移行がみられるが、カマド導入に伴う集団の変化は基本的には確認されず、連続性がみられる。

集落の範囲は、Ⅱ区が耕土直下に地山となり遺構の削平も顕著であることから、ＳＢ31のように住居址の上に貼床している場合削平されている可能性もある。Ⅲ区同様Ⅱ区の方にも広がることが想定され、東西に細長い集落である可能性が想定される。

周辺遺跡との関係としては、集落時期が５世紀後半から６世紀前半であることから、同時期に展開する古墳との関係が想定される。上郷地区の概期の主要な古墳は地区の南端に偏しており、当該地の西側600m程の所にある。ここには５世紀後半の前方後円墳である溝口の塚古墳と宮垣外遺跡があり、馬の埋葬土壙の存在から馬匹集団の墓域と考えられる。さらに、６世紀には横穴式石室をもつ前方後円墳である飯沼天神塚（雲彩寺）古墳が造られる。古墳時代は前方後円墳を中心とする古墳群の造営に複数の集団が関わると考えられるが、今回の調査で確認した集落を形成する集団もこの古墳群形成に関わっていた可能性は高い。本集落に馬との関係を示すものはないが、カマドの導入が古墳築造と連動していることは想定される。矢崎遺跡と同様の集団は湿地帯を挟んだ北側に位置する高屋遺跡でも確認できるとみられ、両者は地形上生産域を同じくする可能性もあり、連動する集落展開が想定される。

なお、付記しておくが、今回の調査で確認したＳＤ06は、上部の削平が甚だしくその時期・性格を特定するに至らなかったが、溝が本来円を描くとすると径23mになり、墳丘を削平された古墳の周溝のようにもみえる。矢崎遺跡内には鳥屋場古墳・久保古墳があるが、調査地点での古墳の存在は知られていない。ただし、上郷地区内には、飯田松川や野底川などの天竜川の支流に面した段丘端部に宮の前垣外古墳や中島古墳群などの古墳が存在しており、ＳＤ06も飯田松川に面した段丘端部に立地する古墳と考えることもあながち否定はできない。今後、周辺部の調査の際には注意する必要がある。

4. 平安時代前期（第36図）

遺構分布は、Ⅲ区で竪穴住居址４軒（ＳＢ24・28・29・30）が重複している。平安時代は古墳時代の住居址の上に貼床しているものがあり、Ⅲ区を中心にⅡ区まで広がる可能性もあることから、古墳時代の集落と同様の広がりをみせると想定される。第２次調査で奈良・平安時代の竪穴住居址・平安時代の工房址が確認されているが、今回の調査地点のある段丘の平坦部ではなく、飯田松川の氾濫原に面した一段低い段丘上に立地することから集落域としては異なると考えられる。

遺構の特徴としては、ＳＢ29・30がカマドのみの確認であり、他も住居址の一部が調査区外となるため検出状況は良好ではない。住居址規模はＳＢ24が一辺3.6～3.7m、ＳＢ28が一辺4.5mである。両者はカマドとみられるが調査区外となり確認できない。ＳＢ29・30は石芯粘土カマドである。出土遺物は基

本的にロクロ土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器があり、いずれも9世紀後半にあたり大きな時期差は認められない。遺構の重複からは、ＳＢ29がＳＢ24に先行し、ＳＢ30は他の住居址が地山を掘り込んで作られているのに対し、古墳時代の住居址の上に貼床していることから、やや時期が後出する可能性もある。ＳＢ24とＳＢ28は近接する。土器組成の特徴をみると、ＳＢ24は軟質須恵器があり、ＳＢ28は軟質須恵器があり、灰釉陶器の種類が多い。ＳＢ29は黒色土器（杯Ａ）が多い。ＳＢ30は須恵器大型品と灰釉陶器である。検出状況の問題もあり断定できないが、変遷としてはＳＢ29→ＳＢ24・28→ＳＢ30が想定される。

遺物の特徴としては、ＳＢ28・29のロクロ土師器と黒色土器に墨書がみられ、ＳＢ24・28の灰釉陶器には硯として転用されているものがある。また、概期の土師器の甕は縦のハケ調整を施した長胴甕が主体であるが、今回確認した中ではロクロ調整の小型甕が主体である。

集落構成としては、極めて住居址の密集度は高いが大きな時期差は認めがたい。上郷史（1978）によると、飯田高校考古学研究会の分布調査で矢崎遺跡からは平安時代の遺物が多く表採されているという。遺物も調査地周辺に広く分布しているとみられる。こうしたことから、集落の広がりは古墳時代と同様、Ⅱ区の方にも広がることが想定されるが、むしろ東西に細長い集落とみられる。今回の調査だけでみれば、平安時代の集落としては、9世紀後半を中心とするある程度規模の大きい集落であることが想定される。

ところで、矢崎遺跡では、第2次調査で奈良・平安時代の集落が確認されている。平安時代の工房址は精錬乃至は鍛造鍛冶遺構であるとされる（岡田2008）。この集落を小平氏は、古墳時代から平安時代まで継続して集落が営まれる長期継続型集落に対し、奈良時代（8世紀後半）から平安時代に成立し9世紀まで比較的継続して営まれる開発型集落の一つとしている（小平2003）。調査範囲からでは集落全体の把握はできないが、報告書によると発掘調査した地点周辺には広範囲に遺構・遺物が確認されていることから、集落規模及び継続期間の拡大が予想される。今回調査の集落は、把握した集落時期としては古墳時代と平安時代の間に断絶があり、現時点では、一段低い段丘面にある第2次調査の集落から、今回調査区のある段丘上面へと集落が移動するようにみえる。しかし、集落全体が把握されていないことから、立地の違いを集落の性格の違いとみるのか、時期差とみるのかは今後の周辺の調査に待たなければならない。

周辺集落としては、矢崎遺跡の下段にある兼田遺跡でほぼ同時期の竪穴住居址1軒が確認されている。集落全体が把握されているわけではないが、住居址の重複がないことから規模・時期ともに限定されている可能性があるが、天竜川と飯田松川の合流点に面した低位段丘での集落変遷を考える上で注意される。

5. 遺構外出土遺物

遺構外出土土器には、縄文時代早期・中期・前期・晩期、古墳時代前期、平安時代のものがある。縄文時代前期後半、平安時代については今回の調査で遺構が確認されているが、それ以外は破片資料のため各時期の様相は不明である。

このうち、縄文時代晩期については第2次調査で、土器・石器・土製円板が飯田松川の氾濫原に面し

た段丘緩傾斜面の数か所から集中して出土している。今回の調査地は同じ段丘上の平坦面からのもので、両者の立地は異なる。今後、土器の詳細な比較検討とともに、土地利用や集落立地を考える必要がある。

古墳時代前期の遺物は矢崎遺跡の西側にある兼田遺跡から出土している。兼田遺跡は天竜川の氾濫原に面した一段低い段丘上にあり、今後集落立地を考える上での資料となりうる。

全体として、矢崎遺跡がある段丘上は、断続的ではあるが生活適地として長期にわたって利用されていたことは想定できよう。今回の調査で確認された集落の存続時期は、縄文時代を除くと各時代における集落の増加する時期にあたり、弥生・古墳・平安時代における低位段丘上に展開する典型的な集落形態を示すといえる。集落形成の要因は各時代により異なるが、水田を基盤とした農業経営が主体となる時代においては、低位段丘は生産域を確保できる安定した居住空間であったといえる。むしろ集落が断絶する時期の様相の中に社会の変化（変革）が現れている可能性も考えられる。

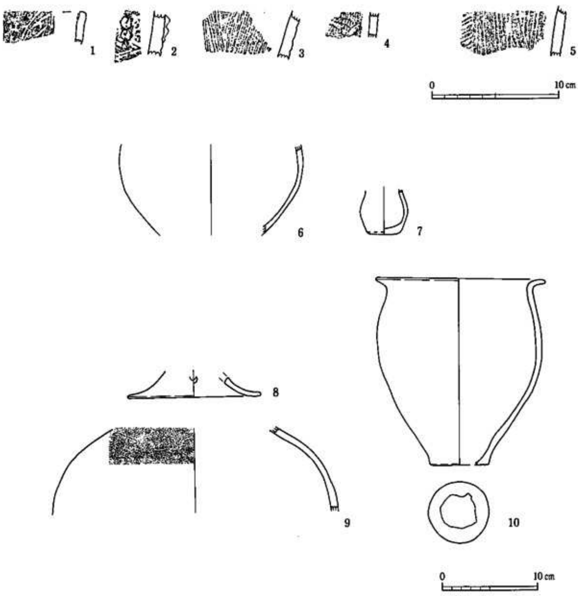
矢崎遺跡のある飯田松川の北側は、広い氾濫原を控えた低位段丘は発達しているが、舌状の段丘が湿地を挟んで連続しており、東西には長いが南北には比較的狭くなっている。そのため、居住空間が地形の制約を受けるとみられる。しかし、広い氾濫原を直下に控え、間近に生産域や湧水をもつことから、中規模程度の集落が展開したものとみられる。周辺にも同様の段丘があり、これらの段丘上にも同様の集落が営まれることが想定される。段丘上での居住域としての連続性がどの程度あるかは周辺部の調査によらなければならない。将来的に集落の出現・廃絶や移動の過程や各時期の居住域・墓域・生産域が明らかになれば、上郷地区の北側にある弥生時代の丹保遺跡や古墳時代から平安時代まで継続する堂垣外遺跡などとの関係を考えることで、低位段丘上の集落関係からみた社会構造の復元がなされるであろう。

参考文献

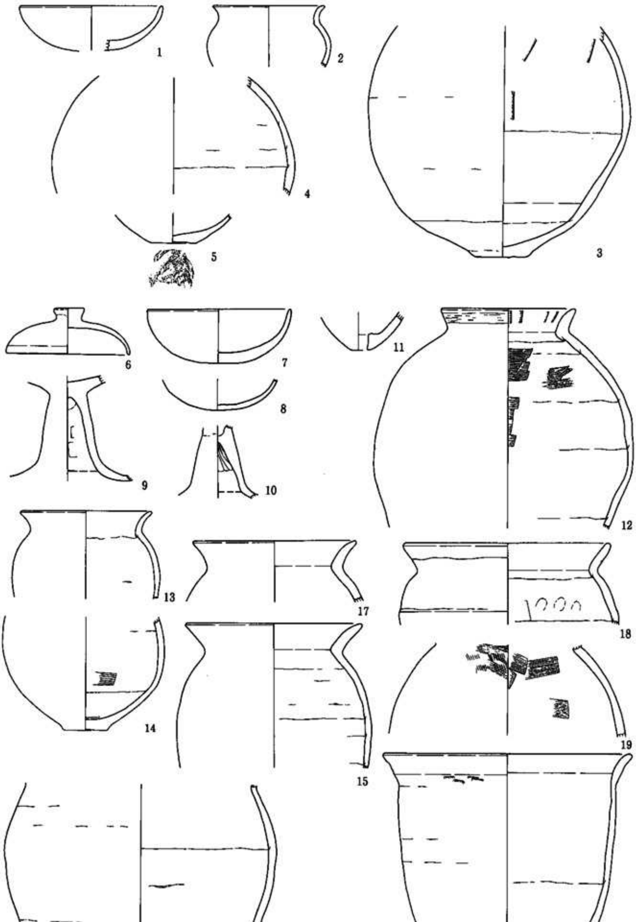
下伊那地質誌編集委員会編　1976　『下伊那の地質解説』
上郷史編集委員会編　1978　『上郷史』
下伊那教育会編　1991　『下伊那史』第一巻
加藤晋平・小林達雄・藤本強編　1994　『縄文文化の研究３　縄文土器Ｉ』　雄山閣出版株式会社
赤塩仁・三上徹也　1994　「下島式・晴ヶ峯式の再提唱とその意義」『中部高地の考古学Ⅳ』
赤塩仁　1996　「諸磯ｂ・ｃ式土器の変遷過程」『(財) 長野県埋蔵文化財センター研究論集Ｉ　長野県の考古学』
小林達雄編　1989　『縄文土器大観』１　小学館
小林達雄編　2008　『総覧　縄文土器』　株式会社アム・プロモーション
山下誠一　2000　「飯田盆地における弥生集落の動向」『飯田市美術博物館研究紀要』第10号
山下誠一　2001　「飯田盆地における周溝墓の動向」『飯田市美術博物館研究紀要』第11号
山下誠一　2002　「飯田盆地における周溝墓再論」『飯田市美術博物館研究紀要』第12号
冨沢一明・広田和穂・直井雅尚・島田哲男・山下誠一　1999　「長野県における古墳時代中期の土器様相」『東国土器研究』第５号
山下誠一　2003　「飯田盆地における古墳時代前・中期集落の動向」『飯田市美術博物館研究紀要』第13号
山下誠一　2004　「飯田盆地における古墳時代後期集落の動向」『飯田市美術博物館研究紀要』第14号
原明芳　1989　「吉田川西遺跡における食器の変容」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書３　吉田川西遺跡』(財) 長野県埋蔵文化財センター
小平和夫　2003　「飯田盆地における古代集落の展開」『信濃』第55巻第２号

小平和夫　2008　「南信濃における古代集落の展開」『信濃の古代郡衙』長野県考古学会2007年度研究大会
岡田正彦　2008　「長野県下の製鉄遺跡と下伊那」『飯田市美術博物館研究紀要』第18号

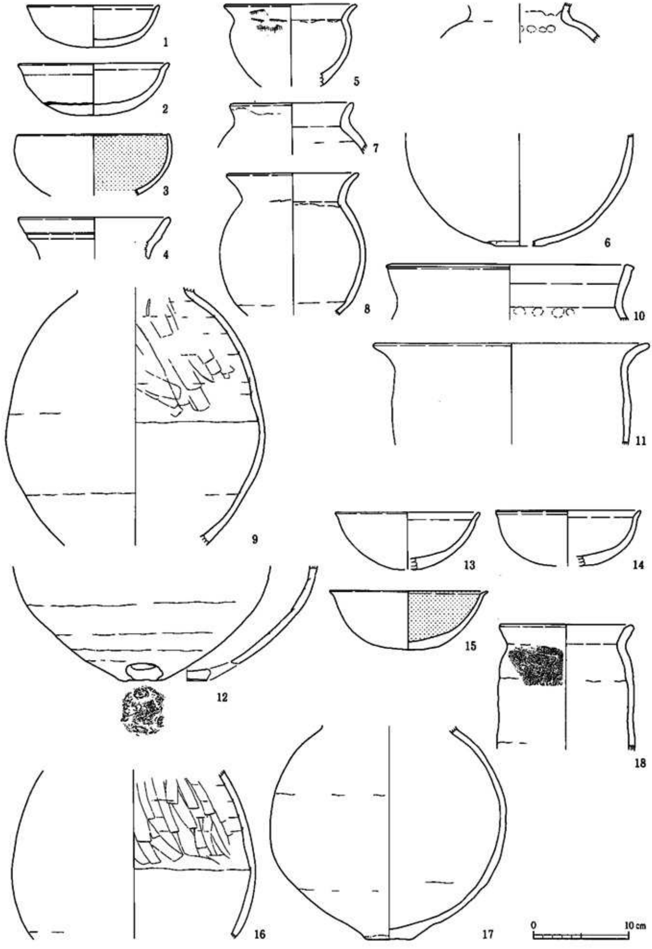
上郷町教育委員会　1984　『高松原Ⅱ』
上郷町教育委員会　1988　『矢崎遺跡』
上郷町教育委員会　1988　『兼田遺跡』
上郷町教育委員会　1989　『中島遺跡　矢崎遺跡』
上郷町教育委員会　1989　『ツルサシ遺跡　ミカド遺跡　増田遺跡　垣外遺跡』
飯田市教育委員会　1994　『堂垣外遺跡　橋爪遺跡　薮上遺跡　長橋遺跡』
飯田市教育委員会　1997　『黒田大明神原遺跡』
飯田市教育委員会　1998　『はりつけ原遺跡』
飯田市教育委員会　1999　『座光寺中島遺跡』
飯田市教育委員会　2000　『別府中島遺跡』
飯田市教育委員会　2001　『黒田垣外遺跡・ミカド遺跡・増田遺跡・見城垣外遺跡』
飯田市教育委員会　2002　『上の坊遺跡』
飯田市教育委員会　2003　『城陸遺跡』
飯田市教育委員会　2005　『恒川遺跡群―遺物編その１（古代・中世）』
飯田市教育委員会　2007　『飯田における古墳の出現と展開』



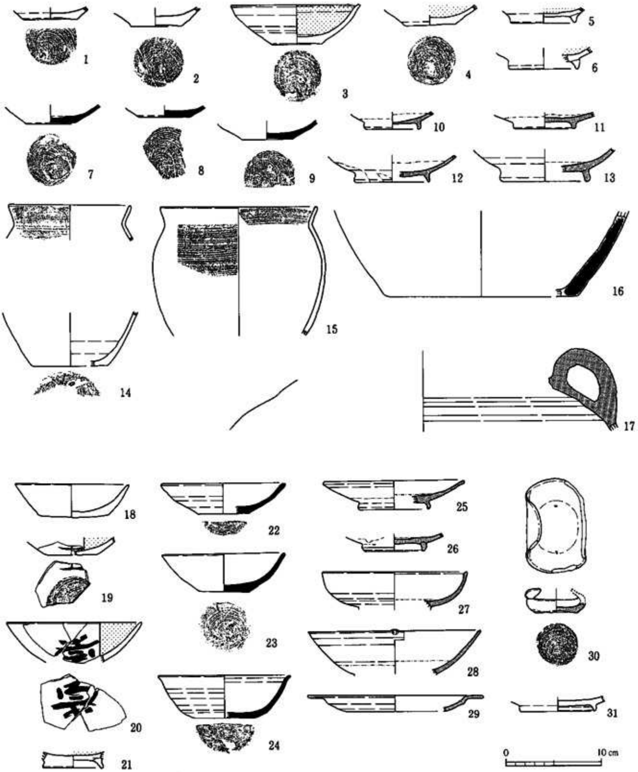
第37図　SB18（1～4）・SB19（5）・SB20（6・7）・SB22（8～10）



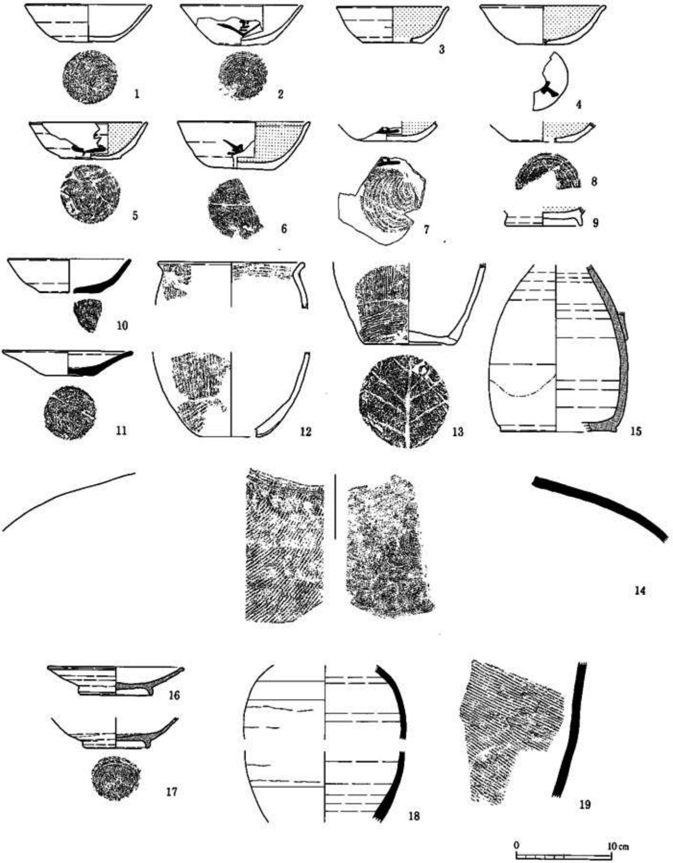
第38図　SB25（1～5）・SB26（6～20）



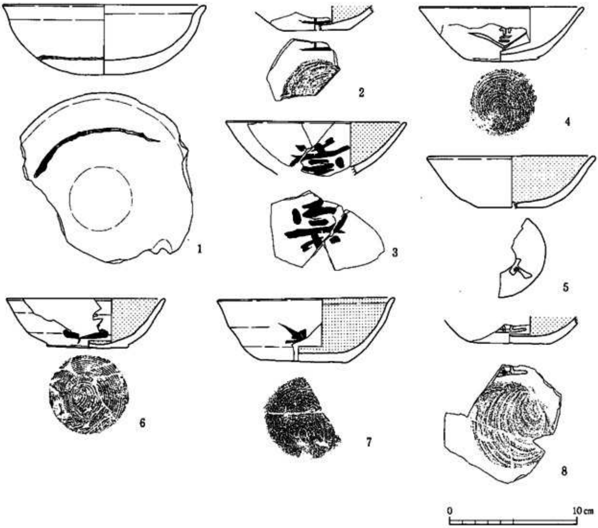
第39図　SB27（1～12）・SB31（13～18）



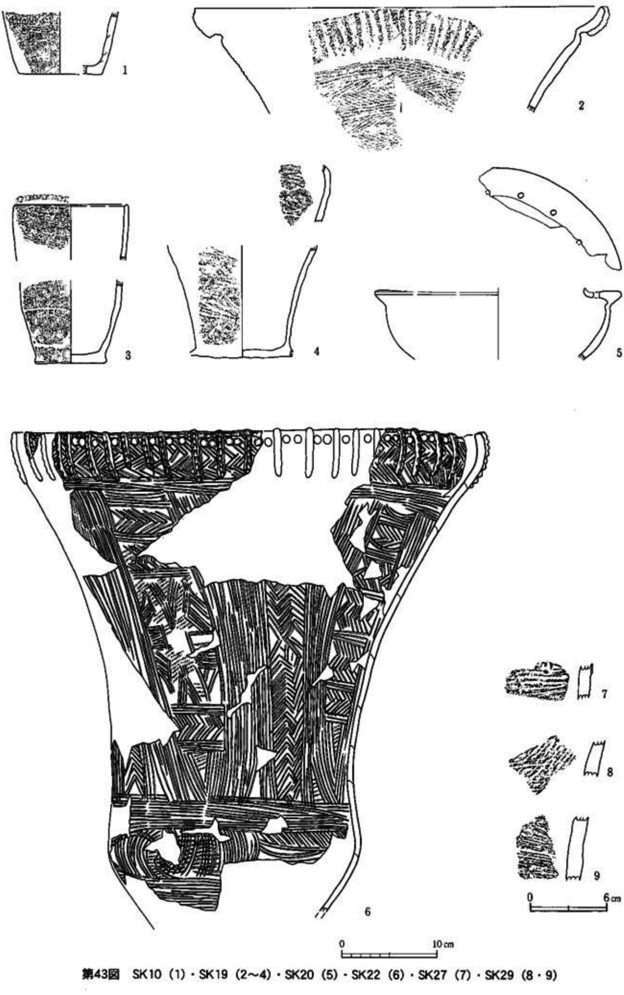
第40図　SB24（1～17）・SB28（18～31）



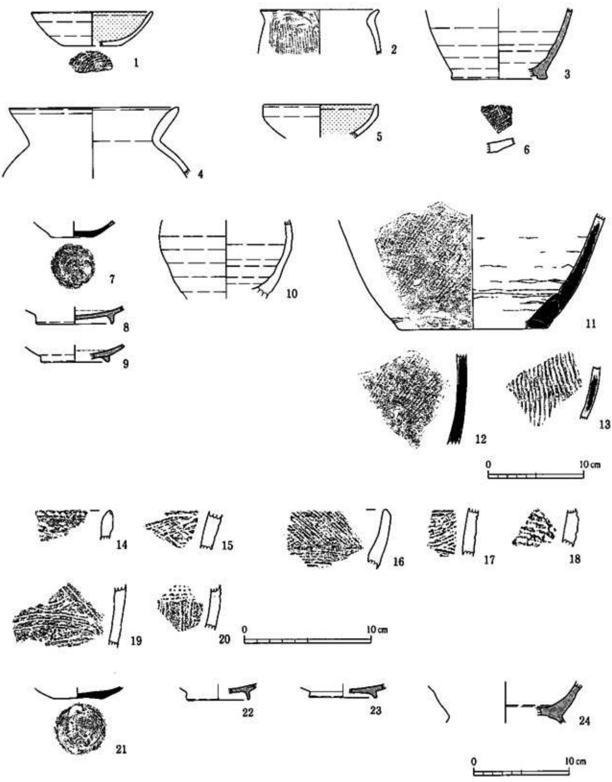
第41図　SB29（1～15）・SB30（16～19）



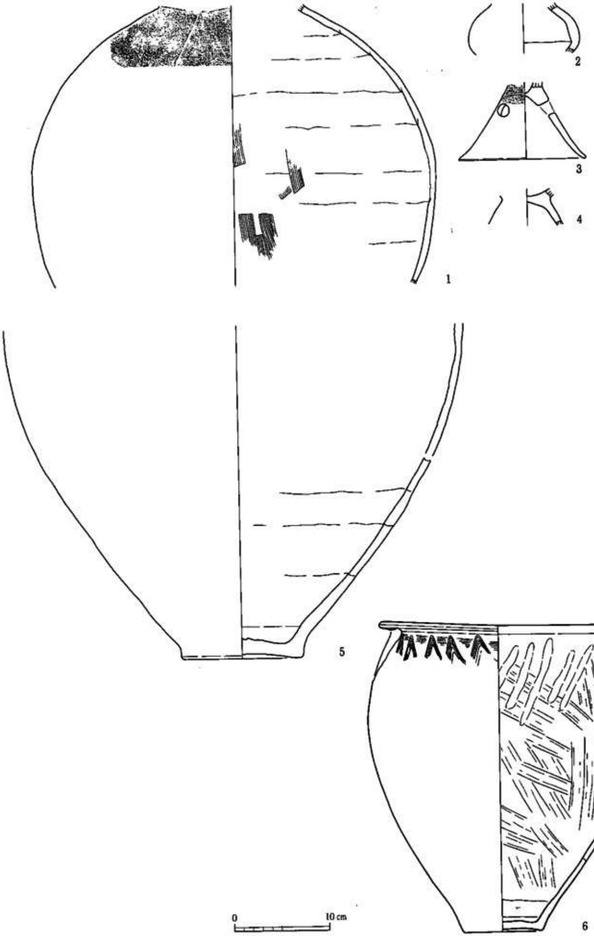
第42図　墨書土器（SB27－1　SB28－2・3　SB29－4～8）



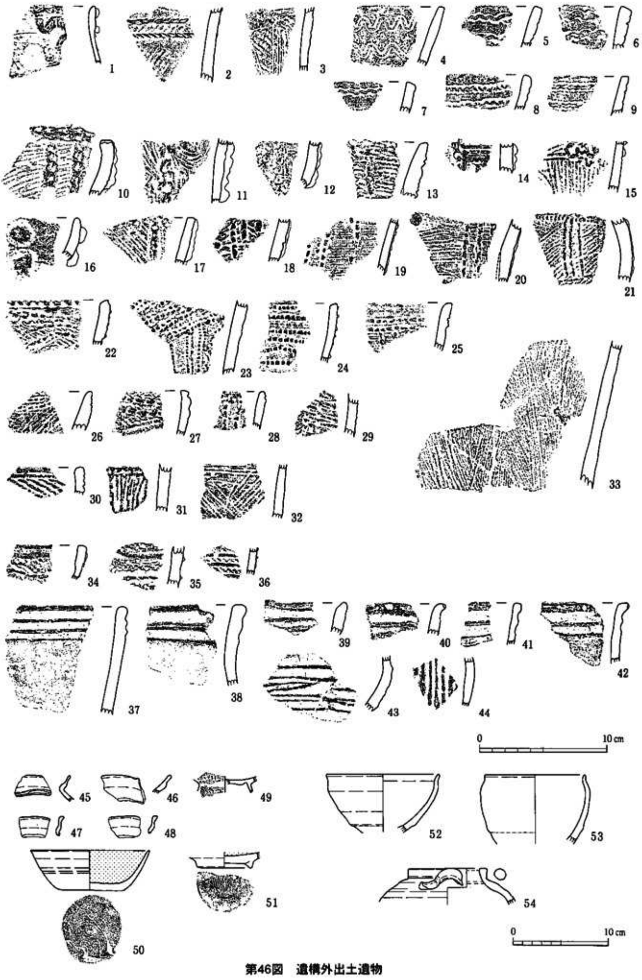
第43図　SK10（1）・SK19（2～4）・SK20（5）・SK22（6）・SK27（7）・SK29（8・9）



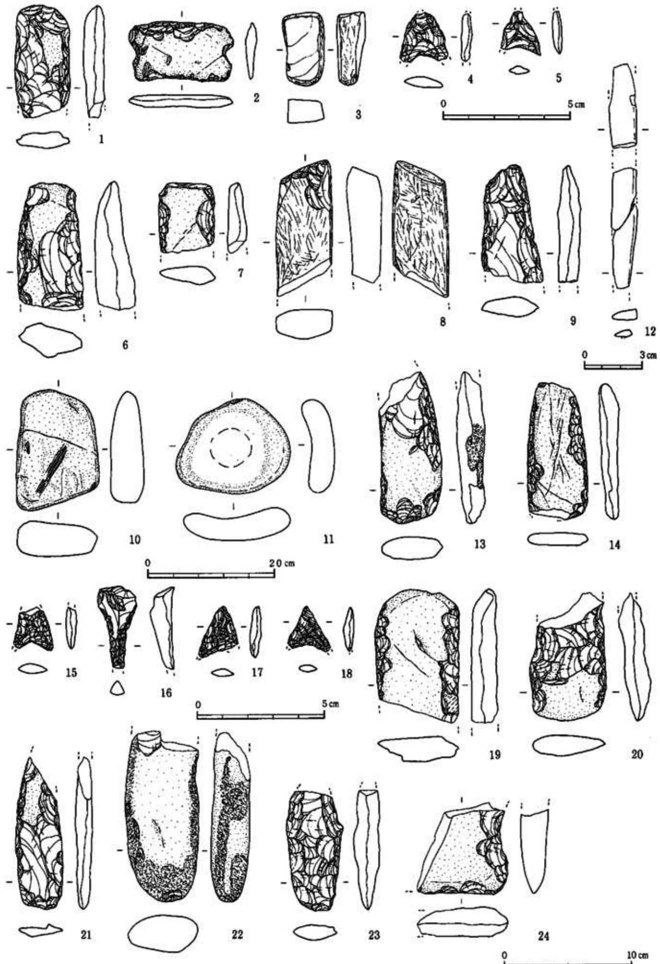
第44図　SK13（1）・SK18（2・3）・SK23（4）・SK28（5）・SK31（6）・SK36（7〜13）・SD01（14・15）・SD02（16〜18）・SD03（19・20）・SD07（21〜24）



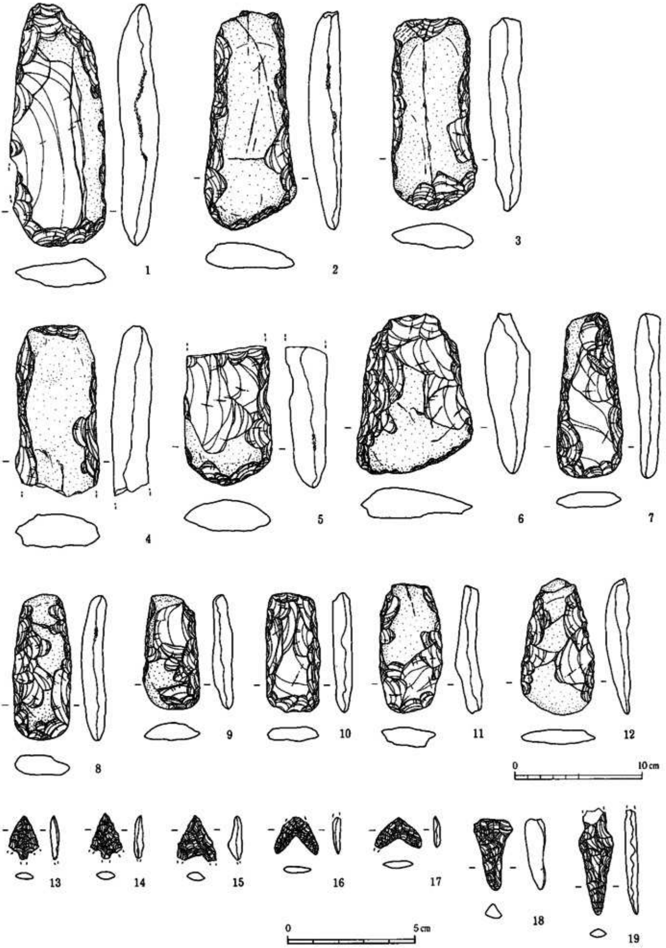
第45図　SM01



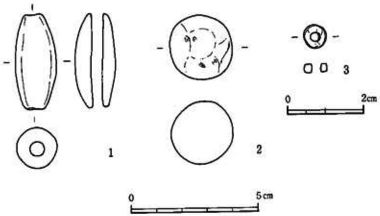
第46図　遺構外出土遺物



第47図　SB22(1〜5)・SB26(6〜8)・SB27(9〜11)・SB24(12)・SK10(13)・SK11(14〜16)・SK12(17)・SK29(18)・SD02(19)・SD03(20)・SD04(21・22)・SM01(23・24)



第48図　遺構外出土石器



第49図　遺構外出土土製品・玉類

写真図版

Ⅰ区全景（北側から）

Ⅱ区全景（北側から）

Ⅲ区全景（南側から）

Ⅳ区全景（南側から）

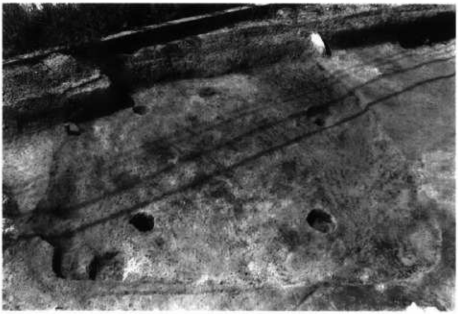
Ⅵ区全景（北側から）

Ⅵ区全景（北側から）

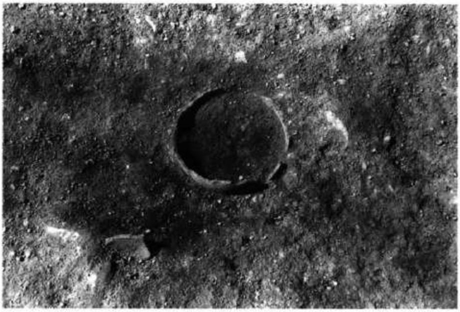
SB18

SB19　炉址

SB21



SB20



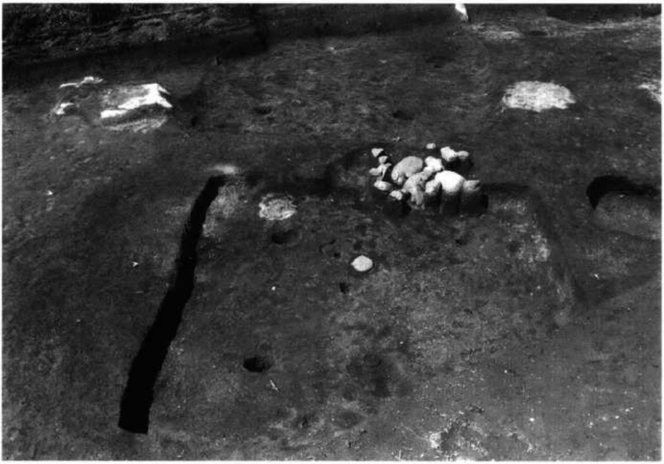
SB20　炉址

SB20　炉址断面

SB22・SK12

SB22　炉址

SB22　炉址断面



SB20（奥）・SB22（手前）

SB25（手前）・SB26（奥）

SB25

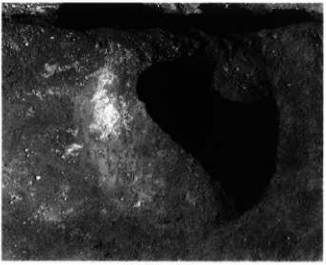
SB25　カマド

同上

SB26

SB26　東カマド

SB26　西カマド

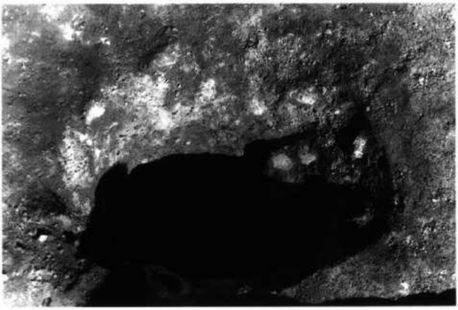


SB26　P5

SB26　西カマド煙道

SB27

SB27　炉址1



SB27　入口施設（P6）

SB31　カマド

SB31　カマド断面

SB31　カマド

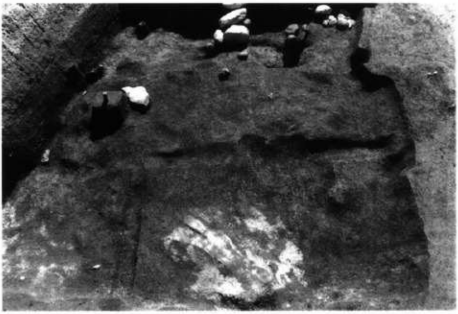
SB24・SK36

SB24

SB24　断面（B－B'）

Ⅲ区全景（北側から）

同　上



SB28（北側から）

SB28（西側から）

SB28　断面（B－B'）

SB29

SB29　カマド

SB29　カマド掘り方

図版16

SB30　カマド

同上

SB30　カマド断面

SK10

SK11

SK12

SK19

SK17

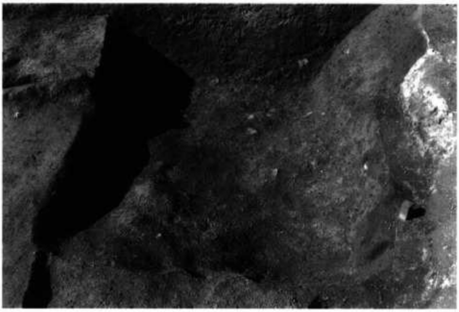
SK13・14・15・18

SK13・14・18

SK15

SK16

SK16　断面


SK16

SK22

SK22　遺物出土状況

同上

SK20

SK23

SK21

SK24

SK26

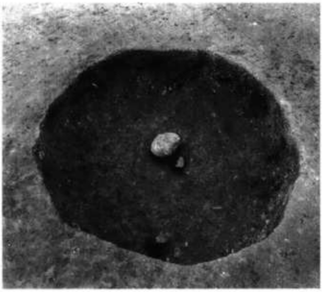
SK26　焼土・炭

SK26　掘り方

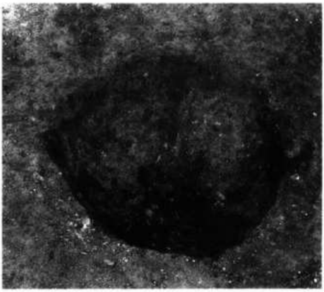
SK25

同上

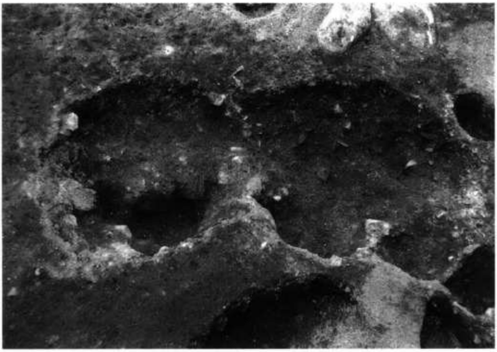
SK24・27・28



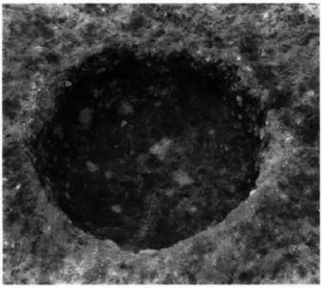
SK29



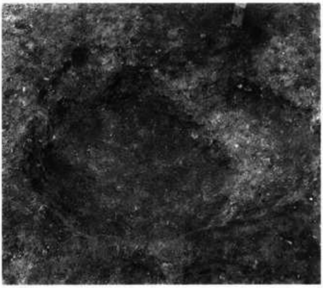
SK30



SK31・32



SK33



SK34

SK36　断面

SK36　上部

SK36　下部

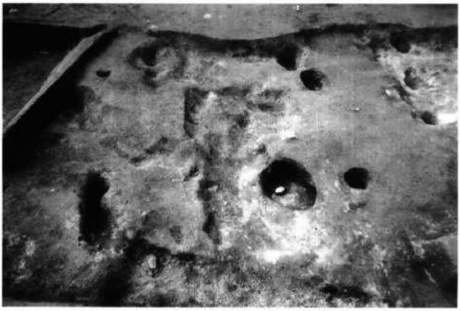
SD01・02

SD03

SD04(手前)・SM01(奥)

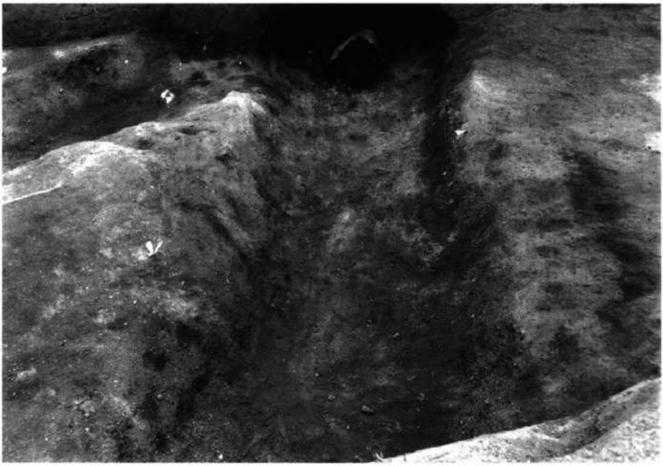
SD05

SD05 断面


SD07

SD06（北側）

SD06（南側）



SM01

SM01　土器棺

SM01　遺物出土状況

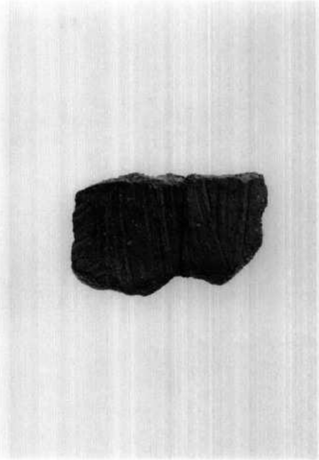
同上

重機作業風景

測量作業風景

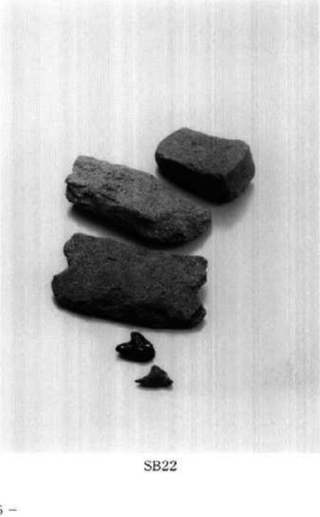
発掘調査風景

SB18



SB19

SB22



SB22

SB25

SB27

SB31

SB26

SB26

SB28

SB29

SB24

SB30

SK19

SK22

SK20

図版38

SD01

SK29

SD02

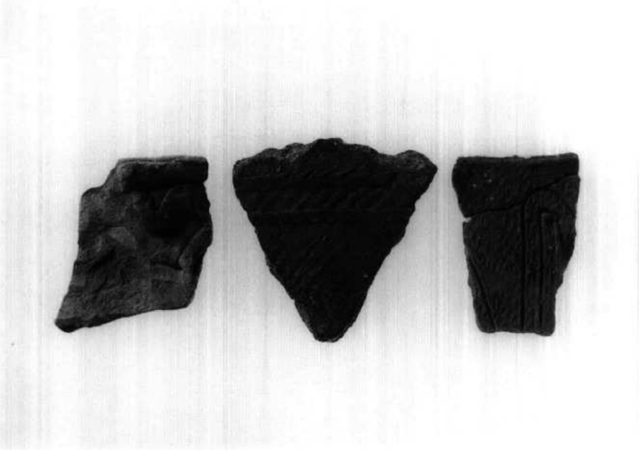
SK10・11・12・29

SD03

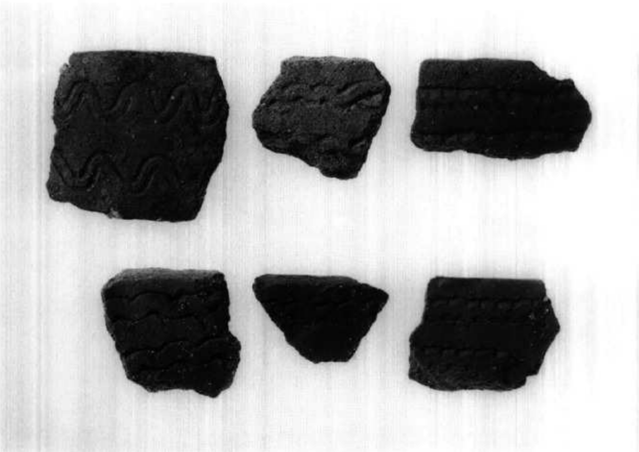
SM01　土器棺

SM01

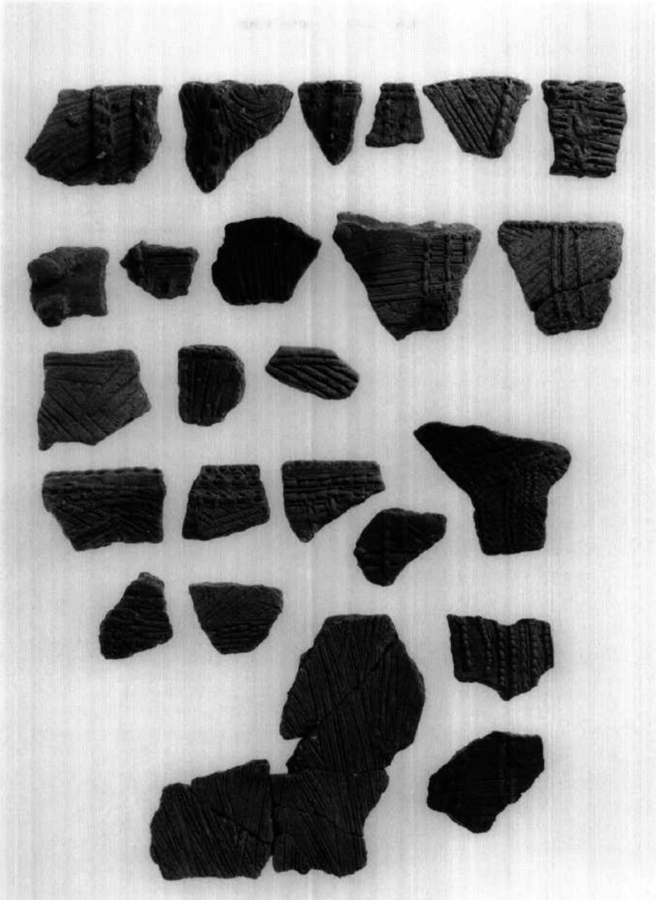
SM01



遺構外出土土器

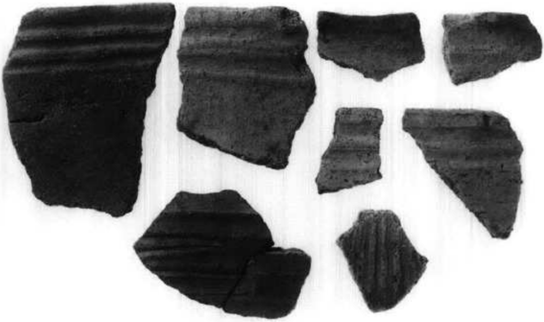


同　上



遺構外出土土器

遺構外出土土器



同　上

遺構外出土土製品・臼玉（Ⅲ区）

遺構外出土土錘（Ⅲ区）

報 告 書 抄 録

ふりがな	やさきいせき
書名	矢崎遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	澁谷恵美子
編集機関	飯田市教育委員会
所在地	〒395－8501　長野県飯田市大久保町2534番地　TEL 0265-22-4511
発行年月日	西暦2009年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
矢崎遺跡（やさきいせき）	飯田市上郷別府（いいだしかみさとべっぷ） 737-1 他	20205		35° 30′ 27″	137° 51′ 12″	平成19年 8月1日～ 12月7日	1161㎡	市道改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
矢崎遺跡	集落 墓	縄文時代 弥生時代 古墳時代 平安時代	竪穴住居址 土坑 竪穴住居址 方形周溝墓 竪穴住居址 竪穴住居址	縄文土器・石器 弥生土器・石器 土師器・須恵器 土師器・須恵器・灰釉陶器 土製品・玉類・陶器類	縄文時代前期の集落 弥生時代後期の集落と墓域 古墳時代の集落 平安時代の集落

矢　崎　遺　跡

2009年3月発行

編集・発行　長野県飯田市大久保町2534番地
飯田市教育委員会
印　　刷　龍共印刷株式会社